岐阜県教育文化財団文化財保護センター
調査報告書　第100集

清　願　寺　跡

２００６
財団法人岐阜県教育文化財団

清願寺跡
（せいがんじあと）

2006

財団法人岐阜県教育文化財団

序

美濃市は、1,300年の伝統をもつ美濃和紙の産地として、また江戸時代の町並みを今に伝える歴史豊かな町として広く有名です。このような伝統と歴史とが育まれた要因は、ただ自然的・地理的環境に恵まれていたからばかりでなく、この地に生き、この地の発展に尽くした先人の知恵と努力によるところが大きいことは言うまでもありません。郷土の歴史をよく認識し、次の世代へと継承するのが、伝統と歴史を受け継いだ私たちの責務です。

このたび、同市横越地内の急傾斜地崩壊対策事業に伴って、その施工範囲における埋蔵文化財の記録保存を図るため、清願寺跡の緊急発掘調査を実施しました。横越地区は、古代から近世にかけて幾多の寺院が建立された宗教的な色彩の濃い集落です。しかし、江龍寺を除く諸寺は既に存在せず、今は地名と伝承、僅かに残された文化財によって過去を偲ぶばかりです。今回、発掘調査を実施した「清願寺跡」も中世寺院の伝承地で、「清願寺」の寺名は現在も遺跡周辺地域の小字名として残っています。

今回の調査では、清願寺の所在と実態の解明について大きな期待がもたれましたが、残念ながら確かな手がかりは得ることはできませんでした。しかし、中世から近世初期まで遡る可能性のある礎石建物跡や、近世の甕埋設遺構などを確認することができました。特に前者は、近接地に所在する阿弥陀堂との関連が推測され、大変興味深い遺構です。遺物は、近世・近代の陶磁器類に加えて、山茶碗・土師器皿・土錘・金属製品・石製品など多種多様な遺物が出土し、この地で営まれた先人のくらしを伺い知る上で貴重な資料になるものと思います。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、美濃市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成18年３月

財団法人岐阜県教育文化財団
理事長　日比　治男

例　　言

1　本書は、岐阜県美濃市横越に所在する清願寺跡（岐阜県遺跡番号21207-09174）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、急傾斜地崩壊対策事業に伴うもので、岐阜県基盤整備部美濃建設事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが実施した。

3　発掘調査は平成16年度に、整理作業は平成17年度に実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆及び編集は、第４章の一部執筆を除き山内裕行が行った。

6　発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、空中写真測量などの業務は、株式会社大同コンサルタンツに委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　寄生虫卵分析、珪藻分析、蛍光Ｘ線分析は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。結果は、第４章に掲載した。

9　発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）

清山健　　高木宏和　　中野晴久　　服部脩　　藤澤良祐　　三島美奈子　　美濃市教育委員会

10　本文中の方位は、世界測地系第Ⅶ系の座標北を示している。

11　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄2004『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが保管している。

目　　次

序
例言
目次
第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過と方法……2
第２章　遺跡の位置と環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5
第３章　遺構と遺物……8
　第１節　基本層序……8
　第２節　遺構の概要……10
　第３節　遺構……12
　第４節　遺物の概要……19
　第５節　遺物……21
第４章　自然科学分析……36
第５章　まとめ……40
参考文献
写真図版
報告書抄録

写真図版目次

図版１　遺跡遠景　遺跡全景
図版２　調査区全景　SX１検出状況　SL１検出状況
　阿弥陀堂（横越清願寺地内）　阿弥陀堂裏手（北西）に残る階段状石組
図版３　SH１検出状況　SH１土師器皿出土状況　SH１完掘状況
　SK１完掘状況　SK２・SK３遺物出土状況　SK２土層
　SK２・SK３完掘状況　SC１石臼・円礫出土状況
図版４　出土遺物（１）
図版５　出土遺物（２）
図版６　出土遺物（３）
図版７　出土遺物（４）
図版８　出土遺物（５）
図版９　出土遺物（６）
図版10　甕内土壌試料と土壌中の花粉化石

挿図目次

第１図　遺跡位置図……１
第２図　調査前地形測量図・調査範囲図
　　グリッド設定図・トレンチ坑位置図……２
第３図　中世・近世の遺跡位置図……６
第４図　明治期の当遺跡周辺の様相……７
第５図　トレンチ土層実測図……８
第６図　遺構配置図……11
第７図　SX１・SQ１・SD１・SD２実測図…12
第８図　SH１・SP１・SP２実測図 ……15
第９図　SK２・SK３実測図 ……16
第10図　その他の土坑実測図……17
第11図　遺物出土分布図……20
第12図　遺構の遺物（１）……25
第13図　遺構の遺物（２）……26
第14図　包含層の遺物（１）……27
第15図　包含層の遺物（２）……28
第16図　包含層の遺物（３）……29
第17図　包含層の遺物（４）……30
第18図　包含層の遺物（５）……31
第19図　主要な花粉化石分布図……38
第20図　調査区西側の遺構面模式図……40
第21図　横越村絵図……40
第22図　寺道・階段状石組位置図……41

表目次

第１表　礎石建物跡一覧……18
第２表　礎石建物跡関連遺構一覧……18
第３表　その他の主要な遺構一覧……18
第４表　土器観察表（染付･色絵･青磁を除く）…32
第５表　土器観察表（染付･色絵･青磁を除く）…33
第６表　土器観察表（染付・色絵・青磁）…34
第７表　土錘観察表……34
第８表　陶製品・土製品観察表……34
第９表　瓦観察表……34
第10表　石製品観察表……35
第11表　金属製品観察表……35
第12表　煙管観察表……35
第13表　銭貨観察表……35
第14表　産出花粉化石一覧表……37
第15表　付着物質の蛍光Ｘ線分析結果　……39

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

当遺跡は、美濃市横越字清願寺に所在する。今回の発掘調査は、岐阜県基盤整備部美濃建設事務所が行う美濃市横越地内の急傾斜地崩壊対策事業に伴うものである。

試掘調査は平成15年７月３日から７月17日に美濃市教育委員会によって行われた。北東から南西へ引く直線上に３箇所の試掘坑（２ｍ×２ｍ）を設定して人力掘削による調査を行った結果、西側の試掘坑において基壇状の造成遺構が発見され、山茶碗・土師器皿・近世陶磁器などの出土遺物が確認された。調査区中央と東側の試掘坑からは遺物の出土はなかったが、溝と推測される遺構が発見された。

試掘調査結果に基づき、平成16年１月23日に岐阜県発掘調査検討委員会で発掘調査を行うことが決定された。その後、岐阜県基盤整備部美濃建設事務所から岐阜県教育委員会に調査の依頼があり、平成17年10月４日より財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが本発掘調査を実施することになった。

第１図　遺跡位置図（S＝1/50,000、国土地理院発行１：50,000「美濃」）

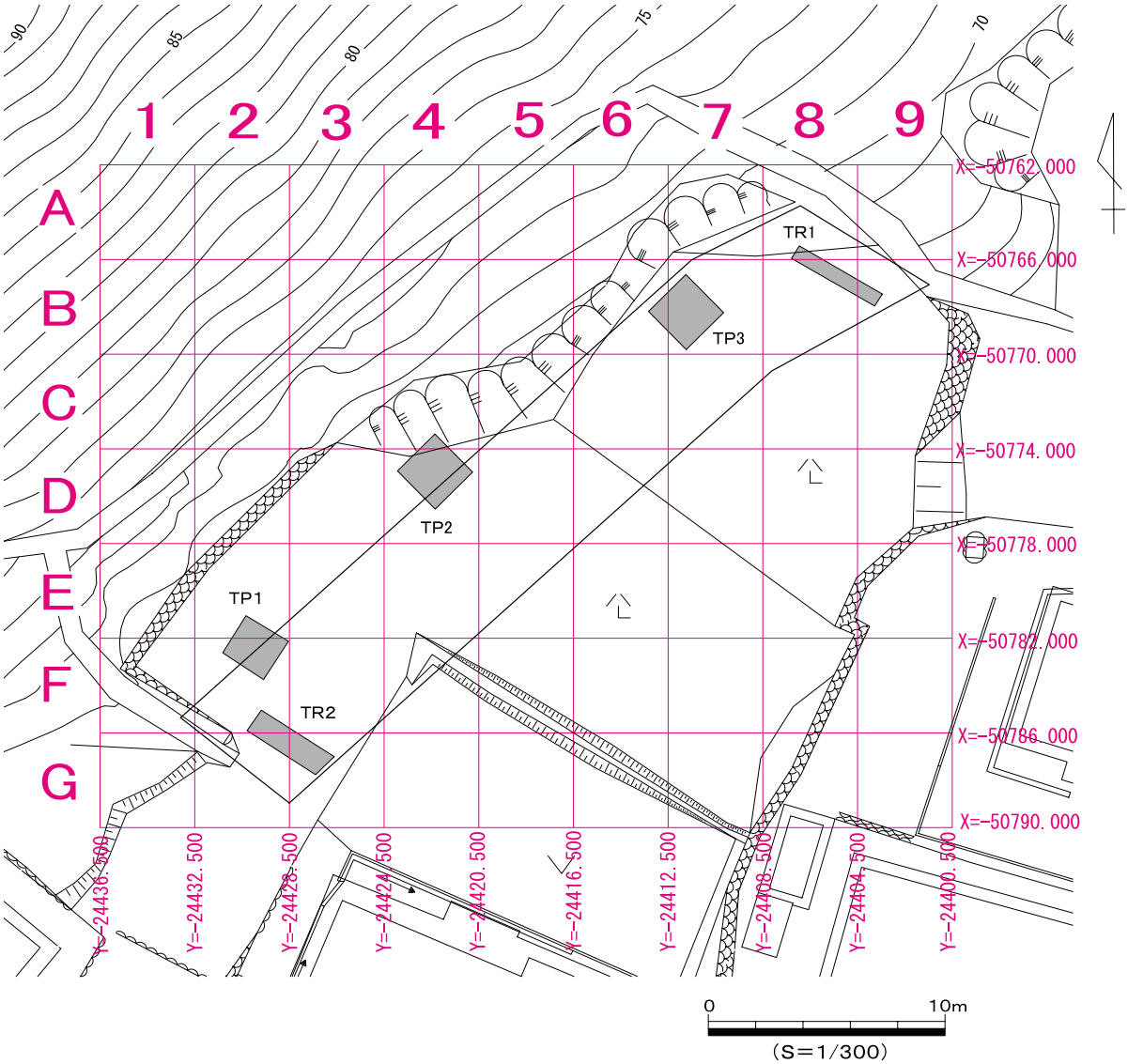
第２節　調査の経過と方法

１　調査期間

平成16年10月４日～同年12月24日

２　グリッドの設定方法

世界測地系第Ⅶ系を基準として４ｍ×４ｍのグリッドを設定した（第２図）。グリッドの呼称は北西端を基準として、北から南へ A～G、西から東へ１～９とし、アルファベットと数字の組み合わせで示した。



第２図　調査前地形測量図・調査範囲図・グリッド設定図・トレンチ坑位置図

３　調査の経過

試掘調査後、擁壁設置予定地が当初の位置よりやや南東へ変更された。調査区面積及び形状の変更はなかったが、試掘調査時の試掘坑 TP１・TP２は、その北側が調査区外へ外れる結果となった。また、当遺跡は、斜面に造成された平坦地上にあることに加え、調査区が狭長な形状であるため、東西で堆積状況の相違が予想された。そこで、調査区の東西両端に新たにトレンチを設定して、基本層序を再確認することとした。基本層序の詳細は第３章第１節で述べる。

調査区は、ほぼ全面に竹が密生していたため、調査前に伐採し、根の除去作業は表土掘削と並行して進めることとした。

調査は、先ず層序を確認するため、試掘調査で入れた３箇所の試掘坑を重機により再掘削するとともに、調査区の東西両端に新たに２つのトレンチを設けた。層序の確認後、重機による表土掘削を行った。調査区西側は、近年まで地域住民のごみ処理の場所として利用されていたため、著しい攪乱を受けていた。そのため、表土には現代の廃棄物が多量に含まれていたが、それに混じって近世・近代の遺物が出土したので、重機掘削を進めながらこれらの遺物を可能な限り採取した。

遺物包含層の掘削作業は調査区東側から、人力掘削にて行った。Ⅱ層にまで入り込む竹の根と多数の礫のため、掘削作業には時間と労力を要した。遺構検出作業は、Ⅲ層上面で行った。また、遺物包含層及び遺構内から出土した遺物は、出土位置をトータルステーションにより測定をして取り上げた。

遺構調査にあたっては、必要に応じて平面図・土層断面図などを作成した。調査区全体の平面図作成は、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行った。その後、遺構の断ち割りを行うとともに、F３・F４・G３区にある造成地を掘削した。造成のための客土を除去した際、近世の甕埋設遺構を検出した。この遺構の詳細については第３章第２節及び第４章で述べる。

本発掘調査は、平成16年10月４日より開始し、同年12月24日に終了した。以下、発掘調査日誌から抜粋して、週毎の調査の経過を記述する。

第１週（10. ４～10. ８）　トレンチ２本を設定し層序を確認。遺跡検討委員会で調査方法を検討。重機による表土掘削の後、グリッド杭を設置。

第２週（10. 12～10. 15）　B７区より人力による遺物包含層掘削を開始。竹抜根のため遺物包含層掘削の進捗遅れる。TP３で確認の溝状の痕跡は、崩落堆積した黒色土層と判明。B７・B８区付近で近世陶磁器がまとまって出土。

第３週（10. 18～10. 22）　雨天多く調査進まず。台風23号の影響による倒木２本を除去。TP１で確認の基壇状遺構は、幕末の遺構であることが判明。

第４週（10. 25～10. 29）　敷き土を伴う礎石建物跡（SH１）を検出。

第５週（11. １～11. ５）　調査区西側の遺物包含層掘削を開始。根が多く掘削作業困難。調査区中央の石列（SL１）は明治初期の遺構と判明。

第６週（11. ８～11. 12）　調査区西側の遺物包含層掘削を継続。週後半は降雨続き、作業が進まず。

第７週（11. 15～11. 18）　調査区西側の遺構検出。Ｅ３区の石組から東南に続く溝（SD１）を掘削。

第８週（11. 22～11. 26）　調査区西側のⅡ層基底面で遺構検出を完了。

第９週（11. 29～12. ３）　空中写真測量の実施に向けての準備。

第10週（12. ６～12. 10）　７日空中写真測量を実施。遺構の断ち割り実施。礎石建物跡（SH１）の

敷土内から土師器皿２点が出土。調査区西側のⅢｂ層を掘削。

第11週（12.13～12.17）　道状遺構（SF１）の下に甕埋設遺構を検出。17日現地調査終了。

第12週（12.20～12.24）　現場埋戻し及び境界杭復元。現場事務所撤去。

４　調査記録及び遺物の整理作業

平成16・17年度に遺物・調査記録の整理作業を行った。作業の流れは次の通りである。

遺物洗浄→遺物の注記→土器接合・補強・補修→土器の実測・観察表の作成→

遺構・遺物実測図の製図→遺物の写真撮影→調査記録・遺物の収納と保管

なお、報告書の本文執筆・編集は、上記の作業と並行して行った。また、甕埋設遺構の甕内の土壌及び外面付着物の自然科学分析を実施した。

５　発掘調査及び整理作業の体制

	平成16年度	平成17年度
理事長	日比　治男	日比　治男
副理事長	高橋　宏之	高橋　宏之
副理事長	平光　明彦	平光　明彦
常務理事兼センター所長	福田　安昭	田口　久之
経営課長	川瀬　崇敏	川瀬　崇敏
調査部長	川部　　誠	川部　　誠
担当調査課長	大熊　厚志	近藤　　聡
担当調査員	山内　裕行	山内　裕行

整理作業従事者　酒衛　成功　竹部　　泉　堀　　三恵

藪下賀代子　山田　弘子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

当遺跡は、美濃市市街地から長良川を隔てて西へ約１㎞、誕生山（標高501.7m）南西麓の傾斜地上に位置する。遺跡の標高はおよそ67mで、長良川水面からの比高差は10mほどである。

当遺跡のすぐ東を流れる長良川は、濃飛国境にその源流を発し、南下して本市に入る。市内を貫流する途中、板取川を合わせる辺りから沖積層を形成し始め、その後、幾つかの支流を合わせながら、木曽川・揖斐川と共に濃尾平野を形成して伊勢湾へ注ぐ。この長良川の水流は古くから交通資源として利用され、当遺跡対岸の下渡及び上有地は舟運の要衝として発展した。

第２節　歴史的環境

１　周辺に存在する中世・近世の遺跡

当遺跡が所在する美濃市横越地区には、中世・近世において複数の寺院が創建されたことが知られている。中世の寺院跡としては長福寺跡がある。当遺跡の西約500m、誕生山麓の小高い位置に所在し、周辺の地表面には五輪石が露出している。中世の墳墓から納骨器として用いられた古瀬戸の有耳壺が出土している（平成４年度調査）。南西約１㎞には東観音寺跡・西観音寺跡がある。前者では寺院の基壇跡が、後者では中世の墳墓が確認されている（平成４年度調査）。また、南西約400mには天正年間創建の建良寺跡が存在するが未調査である。このほか、近世の寺院跡として、徳祥寺跡・宝珠堂跡・明光院跡が存在する。

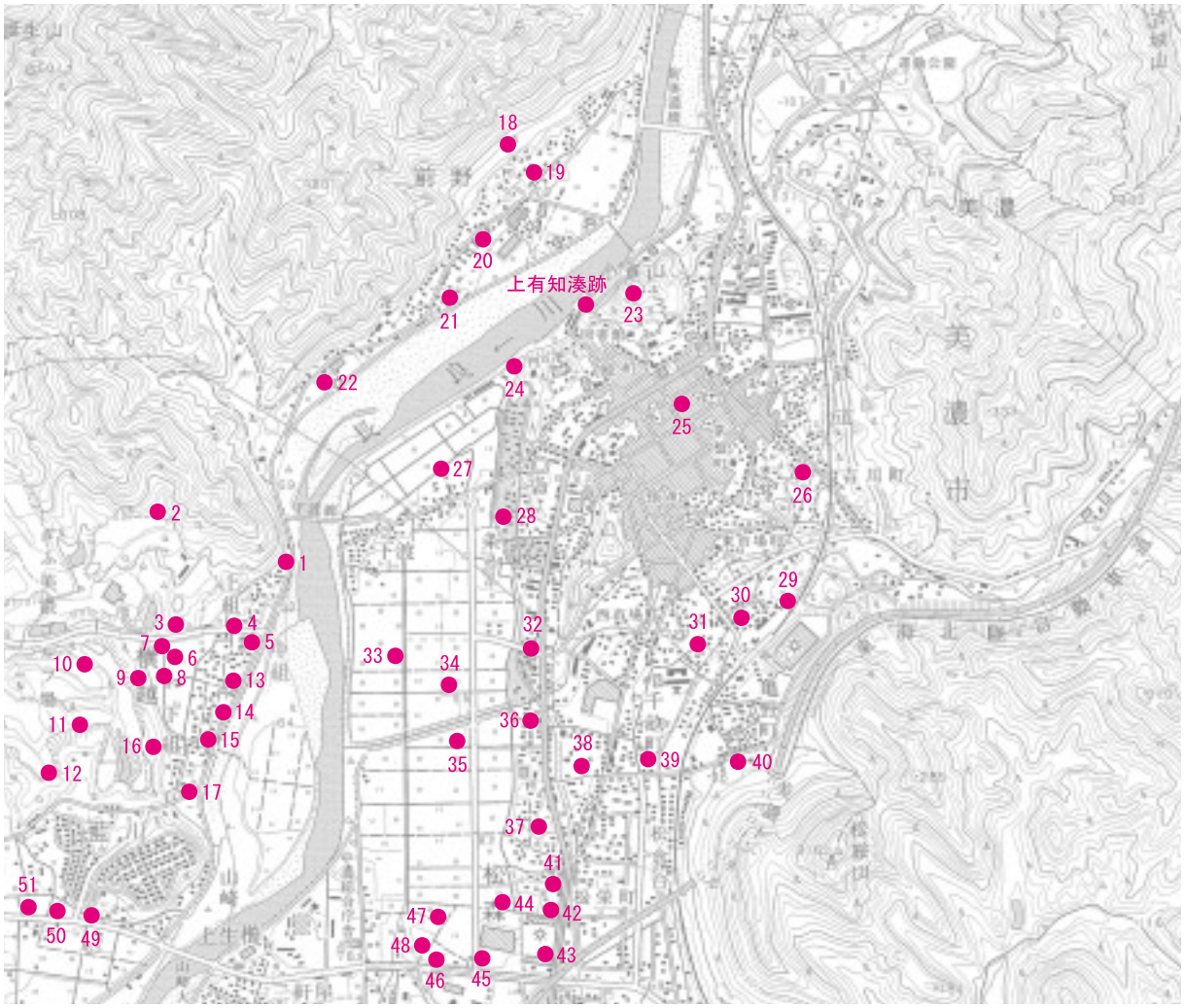
横越地内の江龍寺には、木造薬師如来坐像（県重文）・木造聖観音菩薩立像（県重文）・木造阿弥陀如来坐像（県重文）・木造金剛界大日如来坐像（県重文）などの仏像が安置されているが、これらはかつて横越地内に存在した長福寺・観音寺・建良寺・徳祥寺などの諸寺が廃絶するに及び移されたものと言われている。なお、清願寺に関する記録・文化財は知られていない。

また、集落跡としては、古城跡城下町遺跡（平成６年度調査）・上巾上遺跡（昭和61～62年度調査）が中世の集落跡、金屋街道遺跡（平成６年度一部調査）・乾遺跡（未調査）が中世～近世集落跡として知られている。そのほか、中世・近世の遺物散布地・川湊跡も含め、遺跡位置を第３図に示した。

２　当遺跡周辺の明治期の様相

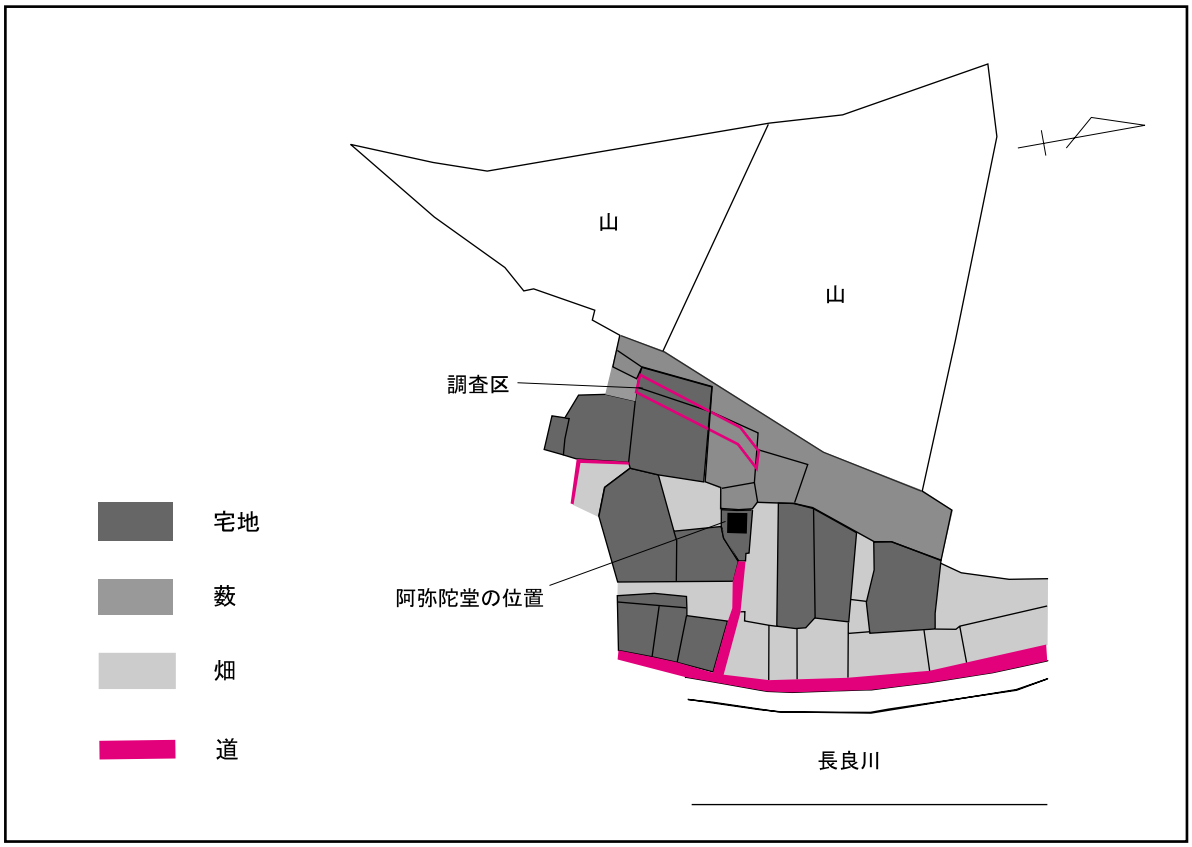
当遺跡が所在する大字横越字清願寺の地籍図のうち、最も古いものは明治期作成の地籍図である。明治期の地籍図で確認できる地割りは、それ以前の地割り及び土地利用を反映していることがあり、調査で検出した遺構と関連付けられる場合がある。そこで、地籍図（明治21年）を頼りに明治期における遺跡周辺の様相を概観する。

第４図は、美濃市所蔵の地籍図をもとに作成したものである。地籍図に見られる明治期の地割り及び道は、現況とほとんど変わりがない。土地の利用状況をみると、長良川沿いの低い土地には畑が広がり、それより一段高い土地は主に宅地として利用されている。山際の土地には薮が広がり、一部は



第３図　中世・近世の遺跡位置図（S＝1/25,000、国土地理院発行１：25,000「美濃」）
＜図中の●印は遺跡の位置を示すもので、遺跡範囲を表すものではない。＞

1	清願寺跡(当遺跡)	14	奥屋敷遺跡	27	百聞遺跡	40	亀野遺跡
2	長福寺跡	15	七右衛門屋敷遺跡	28	上条遺跡	41	水戸遺跡
3	建良寺跡	16	徳祥寺跡	29	桑原遺跡	42	善応寺遺跡
4	外堂遺跡	17	祖端屋敷遺跡	30	広岡東遺跡	43	上巾上遺跡
5	薬師前遺跡	18	前野遺跡	31	広岡西遺跡	44	松森寺下遺跡
6	西屋敷遺跡	19	坂東遺跡	32	段遺跡	45	上竹下遺跡
7	寺後遺跡	20	尾崎遺跡	33	古城跡城下町遺跡	46	古屋敷遺跡
8	岩下遺跡	21	井戸尻遺跡	34	古町遺跡	47	明戸遺跡
9	明光院跡	22	溝添遺跡	35	保寧寺跡	48	観音堂遺跡
10	宝珠堂跡	23	小倉山城跡	36	金屋街道遺跡	49	改田遺跡
11	東観音寺跡	24	港町岩陰遺跡	37	乾遺跡	50	茶屋下遺跡
12	西観音寺跡	25	泉町遺跡	38	上野遺跡	51	一本杉遺跡
13	紋十郎屋敷遺跡	26	倉津遺跡	39	藤森遺跡		



第４図　明治期の当遺跡周辺の様相
（明治21年の地籍図より作成）

宅地となっている。調査区の位置は東側が薮、西側が宅地となっている。なお、阿弥陀堂は、利用した地籍図には記載されていないが、横越自治会が保管する「誕生山境山論訴訟絵図」（天保年間）により現在の位置に存在していたことが確認できるため、第４図に示した。所在地の地目が宅地となっている理由は不明であるが、管理者（江龍寺）の私有地として記載された可能性がある。

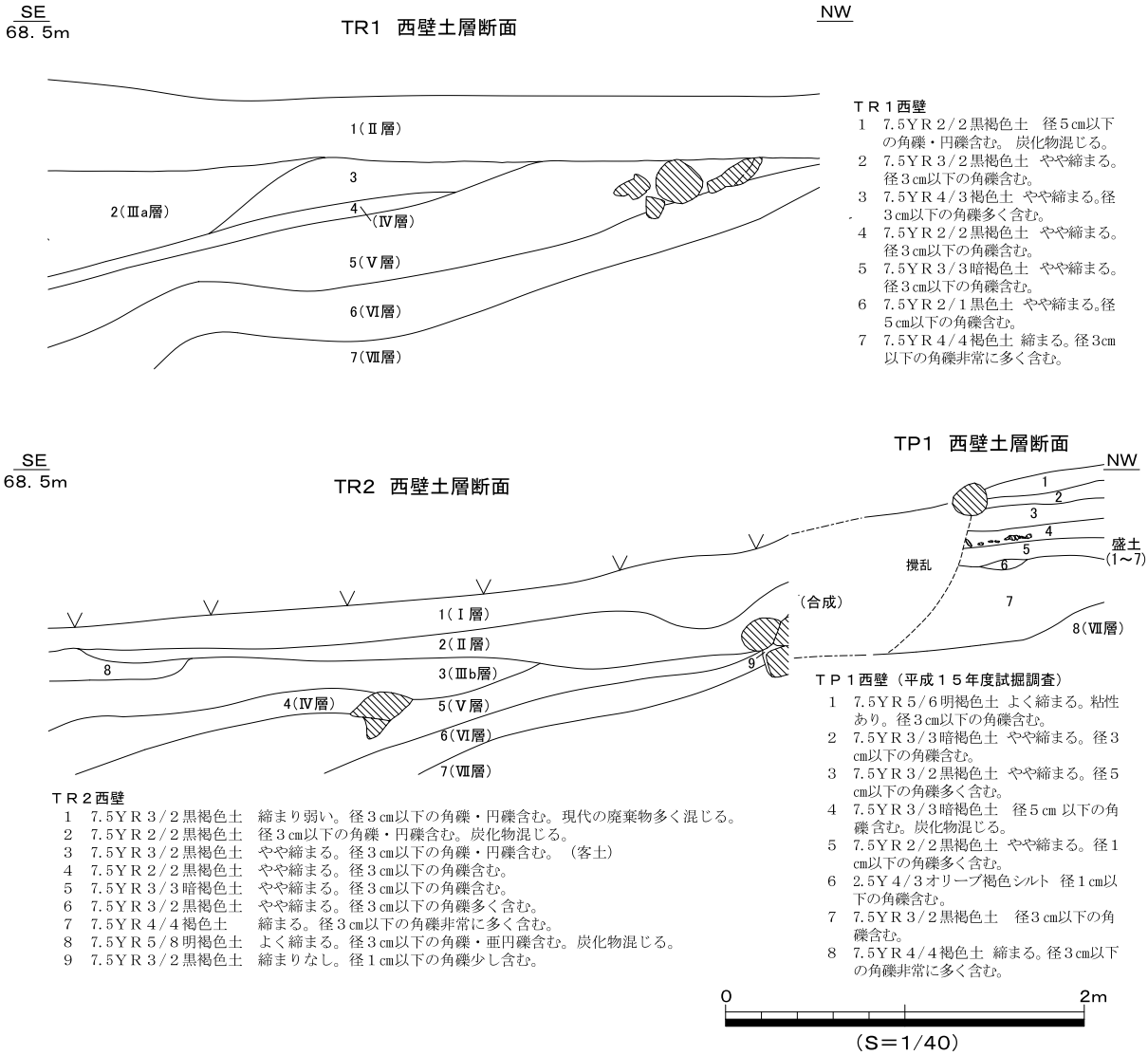
第３章　遺構と遺物

第１節　基本層序

当遺跡は、尾根状端部の斜面に位置している。傾斜は、遺跡の位置する部分で緩やかであるが、尾根上部では急で、そこから供給される土砂の堆積が見られる。表土面は、調査区中央付近を境にして東側が西側よりやや高い。また、調査区内における堆積の様相は一様でなく、調査区の両端では異なる土層が入り込んでいる（第５図）。さらに、TR２の３層・８層のように平坦地を造成するための客土と判断できる部分もあり、TR１と TR２とでは、すべての土層が一致しているわけではない。

基本層序は小規模な土層の入り込みを除き、TR１と TR２とに共通する土層をもとにⅠ層からⅦ層を設定した。このうち遺物を包含していたのは、Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲｂ層である。

以下に基本層序の各層位について概略を述べる。



第５図　トレンチ土層実測図

Ⅰ層（7.5YR3/2黒褐色土、角礫・円礫・炭化物を含む。）

TR２の１層で、表土層である。現代の廃棄物に混じり、近世・近代の遺物を包含していた。なお、TR１西壁断面土層図は、これを除去した後に記録したものである。

Ⅱ層（7.5YR2/2黒褐色土、角礫・円礫・炭化物を含む。）

TR１の１層及びTR２の２層である。遺構面直上に形成された遺物包含層である。近世～近代の陶磁器類や土師器皿など、多くの遺物はこの層から出土した。直下の遺構面の標高は、調査区中央の石列を境にして、その東西で約20㎝の高低差があり、東側が高い。

Ⅲ層（7.5YR3/2黒褐色土、角礫を含む。）

TR１の２層及びTR２の３層である。Ⅲ層は全面に存在するわけでなく、調査区中程から斜面下方に向けて広がりを見せる。

このⅢ層は調査区の東西で性質が異なる。東側のⅢ層は円礫・炭化物・遺物等を含まないことから、尾根上部から自然堆積である可能性が高い。この層が斜面上方に存在しないのは、平坦地をつくる際に削平を受けたためと推測される。西側のⅢ層は角礫のほか、円礫・炭化物・遺物を含むことから、平坦地造成のための客土と判断した。Ⅲ層を調査区中央で区別し、東側をⅢａ層、西側をⅢｂ層とした。

なお、Ⅲｂ層の直下で近世の甕埋設遺構（SK２）を確認した。

Ⅳ層（7.5YR2/2黒褐色土、角礫を含む。）

TR１及びTR２の４層で、無遺物の崩落堆積層である。

Ⅴ層（7.5YR3/3暗褐色土、角礫を含む。）

TR１及びTR２の５層で、無遺物の崩落堆積層である。

Ⅵ層（7.5YR3/2～7.5YR2/1黒褐色土～黒色土、角礫を含む。）

TR１及びTR２の６層で、無遺物の崩落堆積層である。調査区東側で一層黒みが強いが、下層のⅦ層が東西で共通であるため、どちらもⅥ層とした。なお、試掘調査の際、TP２・TP３で検出した「溝と推測される遺構」は、Ⅱ層基底面において帯状に現れたこのⅥ層を誤認したものである。

Ⅶ層（7.7YR4/4褐色土、角礫を非常に多く含む。）

TR１・TR２の７層及びTP１の８層である。締まりの強い無遺物の土層で、地山と判断した。後述するSX１は、このⅦ層の上面で検出した遺構である。

なお、TR２の西壁断面とTP１の西壁断面は同一線上に存在しないが、層位の関連を示す便宜上、図４では２つの土層図を合成した。試掘調査で確認したTP１の１層～７層は、８層（基本層序のⅦ層）の上に築かれた造成遺構（盛土）である。造成の時期と性格については、第３章第２節で述べる。

第２節　遺構の概要

今回の調査で確認した遺構面は２面で、Ⅱ層基底面及びⅢｂ層基底面（遺構面上に形成された包含層の層位をとり「○層基底面」とした）において検出した。ただし、調査区のほぼ中央に確認できた地境石列を境にその東西で時期差があり、東側の標高は西側よりも20㎝ほど高いにもかかわらず、出土遺物による時期判定では東側の遺構が西側に先行することが判明した。したがって、本節では調査区を東西に分けて遺構の概要を述べる。

調査区東側では、Ⅱ層基底面において、礎石建物跡１棟、土坑１基、ピット２基を確認した。このうち、ピット２基は礎石建物跡に伴う遺構の可能性がある。

調査区西側では、Ⅱ層基底面において、石組（盛土・排水溝を伴う）１基、石列２基、溝跡１条、道状遺構１条、土坑２基、焼土遺構１基、ピット４基を確認した。また、調査区西側の南西部分（F３・F４・G３区）にはⅢｂ層（平坦地造成のための客土）が存在し、このⅢｂ層基底面において甕埋設遺構１基・土坑１基を確認した。この遺構面は、埋設されていた甕（遺物番号４）の生産時期から推測して、17世紀末（ないしは18世紀初頭）頃の成立と考えられる。

これらのうち、幕末期の屋敷跡に伴う遺構については本節で概略を述べるに止める。溝跡（SD３）は、昭和期まで機能していた新しい溝跡であるため記載を略す。それ以外の遺構については第３章３節で詳細を述べる。

なお、遺構名称は下記の略号を用い、遺構略号ごとに通番を附した。また、土質注記については下記の要領で記述した。

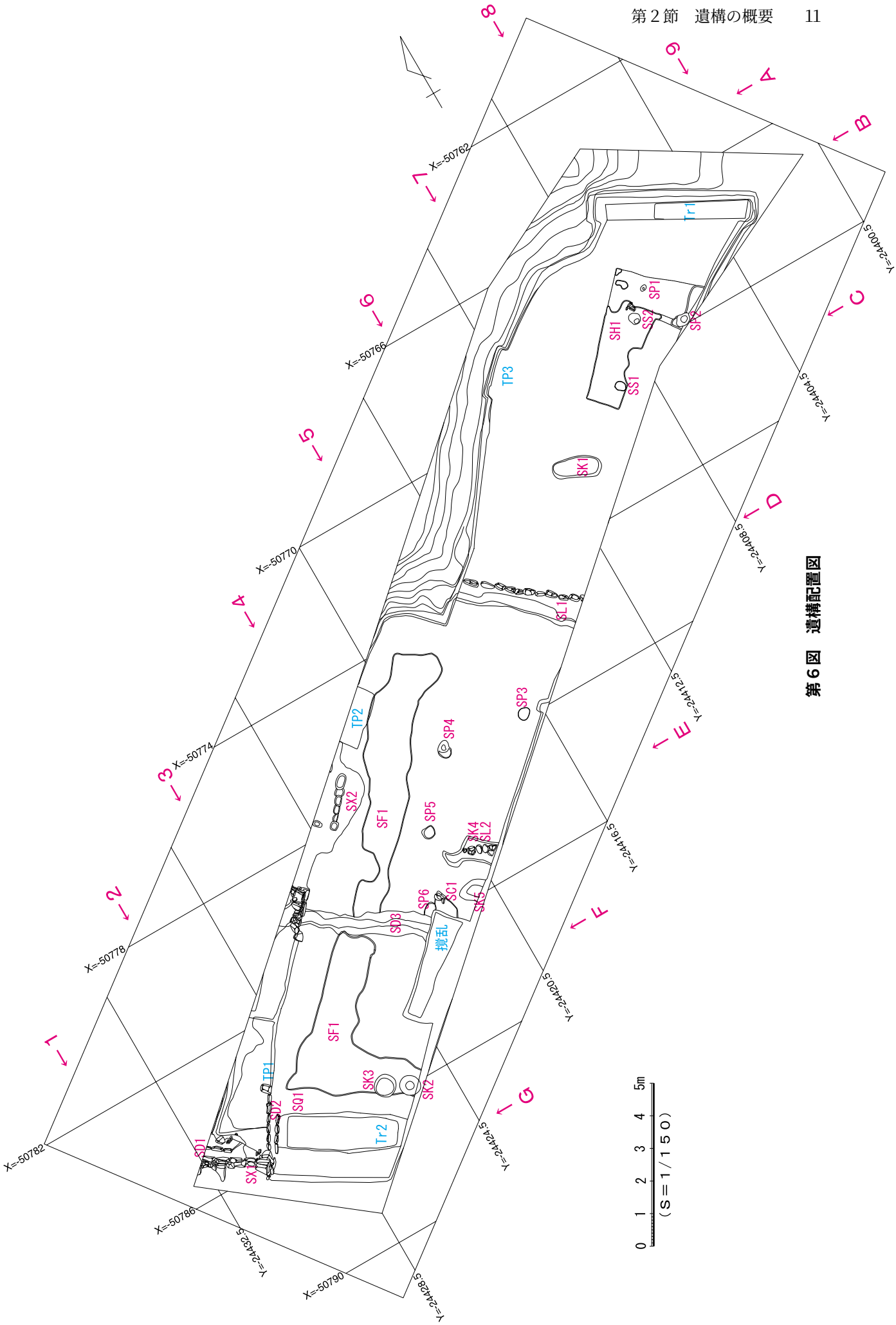
遺構略号　SH＝礎石建物跡　SS＝礎石　SX＝石組　SL＝石列
SQ＝盛土　SF＝道状遺構　SD＝溝跡・排水溝跡
SC＝焼土遺構　SK＝土坑　SP＝ピット

土質注記
・原則として、土色・締まり・粘り・含有物の４点を記述した。
・土壌の締まりが普通の場合は、その記述を略した。
・土壌に粘性のない場合は、その記述を略した。
・遺構覆土に包含される礫の大きさは、その形状を問わず「径○㎝」と表記した。

幕末～明治時代の屋敷跡に伴う遺構

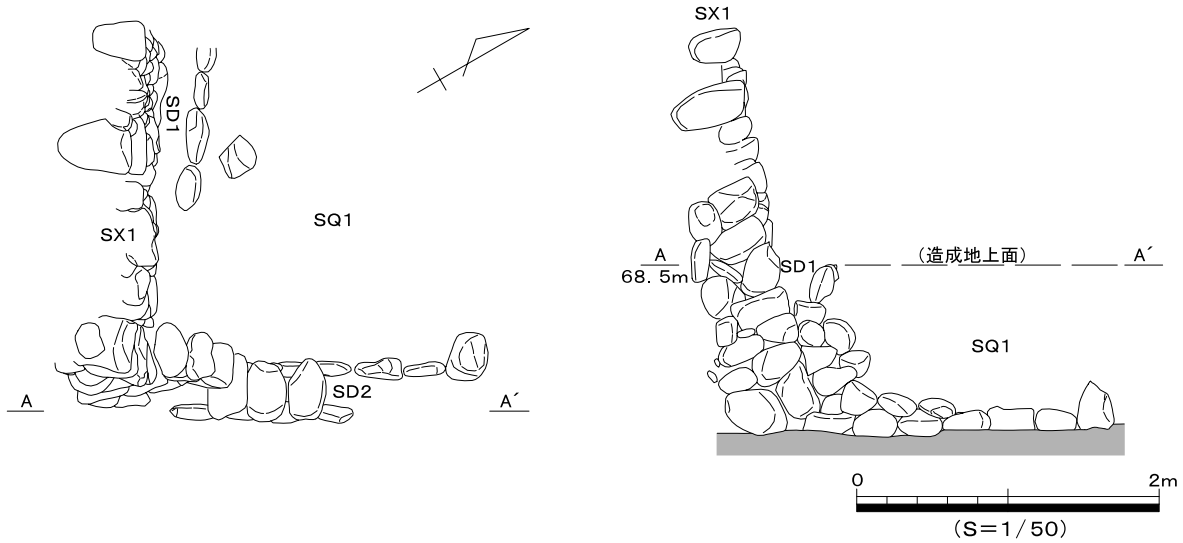
石組（SX１・SX２）・盛土（SQ１）・排水溝跡（SD１・SD２）

地上に露出していた石垣と、調査により確認した石垣下部の石組を総称してSX１とした(第６図)。この遺構は、周囲より１ｍほど小高い台状の土地を造成する盛土（SQ１）と、上下に設置された雨水処理のための排水溝跡（SD１・SD２）を伴う。SQ１は、試掘坑TP１で「基壇状の遺構」として確認されたものである。地山上の堆積層を擂鉢状に掘り窪め、版築の要領で造成した平坦地で、SX１下部の石組がその土留めの役割を果たした。また、この土留めのため石組から北東方向へ延長した直線上に、石組を抜き取った痕跡（SX２）が確認できた。このことから、石組は南西から北東へ９ｍ


X=-50782
X=-50786
X=-50790
X=-50778
X=-50774
X=-50770
X=-50766
X=-50762
Y=-24432.5
Y=-24428.5
Y=-24424.5
Y=-24420.5
Y=-24416.5
Y=-24412.5
Y=-24408.5
Y=-24404.5
Y=-24400.5
1
2
3
4
5
6
7
8
A
B
C
D
E
F
G
SD1
SX1
SD2
SQ1
TP1
SK3
SK2
SF1
Tr2
SD3
SP6
SC1
SK5
SK4
SL2
SP5
SP4
SX2
TP2
SF1
撹乱
SP3
SL1
TP3
SK1
SH1
SS2
SP1
SS1
SP2
Tr1
0 1 2 3 4 5m
（S＝1／150）

第６図　遺構配置図

ほどの規模であったことが推測できる。しかし、住居の用地としては奥行きは狭く、山際に造成されていることも合わせると、蔵のような建物が存在した可能性が高い。明治21年の地籍図では、調査区西側の土地は「宅地」と記されており、これらの遺構は屋敷に伴う施設であったと考えられる。



第７図　SX１・SQ１・SD１・SD２実測図

石列（SL１）

調査区のほぼ中央に位置した地境の石列である。この石列も調査区西側に存在した屋敷に伴うもので、土地の起伏を利用して石を立て、西側から土を盛ってそれを支える。盛土内より出土した遺物から、明治初期の遺構と判断した。

道状遺構（SF１）

調査区西側で検出した帯状の硬化面で、周囲より僅かに小高い。屋敷地内に設けられた道と推測され、SX１の正面に突き当たり、F３区でＬ字状に折れて北東に延びる。遺構の断ち割りにより幕末期の近世陶器の破片が３点出土したことから、SX１と同時期の遺構と判断した。

第３節　遺構

１　調査区東側の遺構

礎石建物跡（SH１）

B７・B８・C７・C８区のⅡ層基底面で検出した。遺構の南部分が調査区から外れるため、確認できたのは礎石１基（SS１）・礎石掘形１基（SS２）に止まった。梁軸の方向から推測した桁軸の方向は、北から42°西へ傾いており、ほぼ南東向きの建物であったと推測できる。梁行１間（2.1m）、桁行不明の礎石建物跡で、Ｌ字形の敷土（褐色土）を伴う。第８図では、敷土を確認できた範囲と、当時敷土が存在したと推測される範囲を示した。敷土範囲の北側のラインは、梁軸と平行する。SH１周辺の遺物包含層からは、近世陶器・土師器皿などの遺物が多量に出土した。また、敷土内のア・イの地点において、内面が丁寧に調整された土師器皿２点（遺物番号１・２）が出土した。

SP１は梁軸の延長線上に確認できたピットで、位置と埋土の状況からSH１に関連する杭穴であっ

た可能性も考え得る。SP２は敷土を除去した跡に検出したピットで、埋土は敷土が入り込んだものであった。SP２がSH１に伴う遺構か、先行する遺構かは不明である。

SH１のすぐ東の４ｍほど低い土地には、現在も阿弥陀堂があり、さらにその裏手（北西）には階段状の石組が残存している（図版２）。この階段状の石組は、後世に築かれた石垣により遮られ、現在は下から３段目までしか確認することができないが、これを延長するとSH１のほぼ正面に当たる。これらのことから、SH１は阿弥陀堂のような仏堂的な宗教施設であったと推測することも可能である。

SS１は、C７区で検出した座りのよい礎石である。長径49㎝、短径30㎝、厚さ９㎝の偏平な川原石（円礫）で、やや窪んだ面を上に向けて据えられていた。掘形に根石を用いなかったのは、この礎石が扁平で根石なしでも安定して据えることができたためと思われる。また、この礎石（SS１）の裾に敷土が被さっていたことから、礎石を設置した後に敷土を施したことが判明した。SS２は、B８区で検出した礎石掘形である。礎石自体は取り除かれていたが、埋土中に径10㎝程の角礫を１点確認した。根石と推測した。

土坑（SK１）

C７区で検出した楕円形・平底の土坑である。径10～20㎝の円礫が多数混じり、人為的に埋められたものと思われる。土師器皿と瓦の小破片が出土した。近世の遺構と思われるが、詳しい時期と性格は不明である。

２　調査区西側の遺構

甕埋設遺構（SK２）

F３・G３区のⅢ層基底面（平坦地造成のための盛土下）で検出した甕の埋設遺構である。甕（遺物番号４）の下位を地中に埋めて固定してあった。埋設のための土坑と甕との間には、粘土状の物質が敷かれていた。これは甕をより安定させて設置するためのものと推測される。甕の底部～体部下位は当時のままの状態で出土したが、口縁部～体部上位は破損しており、破片の大半は甕の内部に落ち込み、一部は隣接の土坑（SK３）内に散在していた。SK２・SK３の埋土は、平坦地を造成するための客土で、埋設甕の上部は造成時、若しくはそれ以前に人為的に打ち欠かれたものと思われる。また、SK２の埋土からは、甕（遺物番号４）の破片のほか、土師器皿・別個体の甕の体部破片・若干の近世陶器が出土した。遺物出土状況を第８図に示した。図で確認できる遺物のうち、円礫・土師器皿のほかは甕の破片である。

埋設甕の用途は農作業用の水甕であった可能性が高く、時期は17世紀末～18世紀初頭である。なお、甕の内容物及び外面付着物についての分析結果は、第４章で詳述する。

土坑（SK３）

F３区のⅢ層基底面で検出した円形・平底の土坑で、SK２に隣接する。SK２に埋設されていた甕（遺物番号４）の口縁部破片のほか、土師器皿・近世陶器・径20～30㎝の円礫が出土した。SK３の埋土中に粘土状の物質は確認できなかったが、SK２では別個体の甕の破片が出土しており、SK３に甕が埋設されていた可能性も否定できない。甕の埋設遺構に隣接する土坑を伴う例としては、美濃市の山ノ神遺跡（美濃市教育委員会2002）でほぼ同時期の事例が報告されている。

焼土遺構（SC１）

Ｅ４～Ｆ４区のⅡ層基底面で検出した焼土遺構である。遺構内の北隅には焼けた円礫２点と石臼（遺物番号17）が出土した。移動式焜炉などを屋外で用いた痕跡ではないかと思われる。移動式焜炉の使用痕跡なら、時期は幕末期である。

土坑・石列（SK４・SL２）

Ｅ４～Ｅ５区のⅡ層基底面で検出した土坑（SK４）の褐色の埋土を除去すると、円礫を寝かせて並べた石列（SL２）が確認できた。石の並びは、この地点を北限として調査区外へ延びる可能性がある。軸は西から25°北に振り、SL１や地籍図に見える地境線とほぼ平行となる。性格については不明である。瓦小破片が２点出土した。瓦の出土したことから近世と推測されるが、詳しい時期までは言及できない。

土坑（SK５）

Ｅ４～Ｆ４区のⅡ層基底面で検出した土坑である。近世陶磁器が出土した。

ピット（SP３）

Ｄ５区で検出した円形・平底の小穴である。時期・性格は不明である。

ピット（SP４）

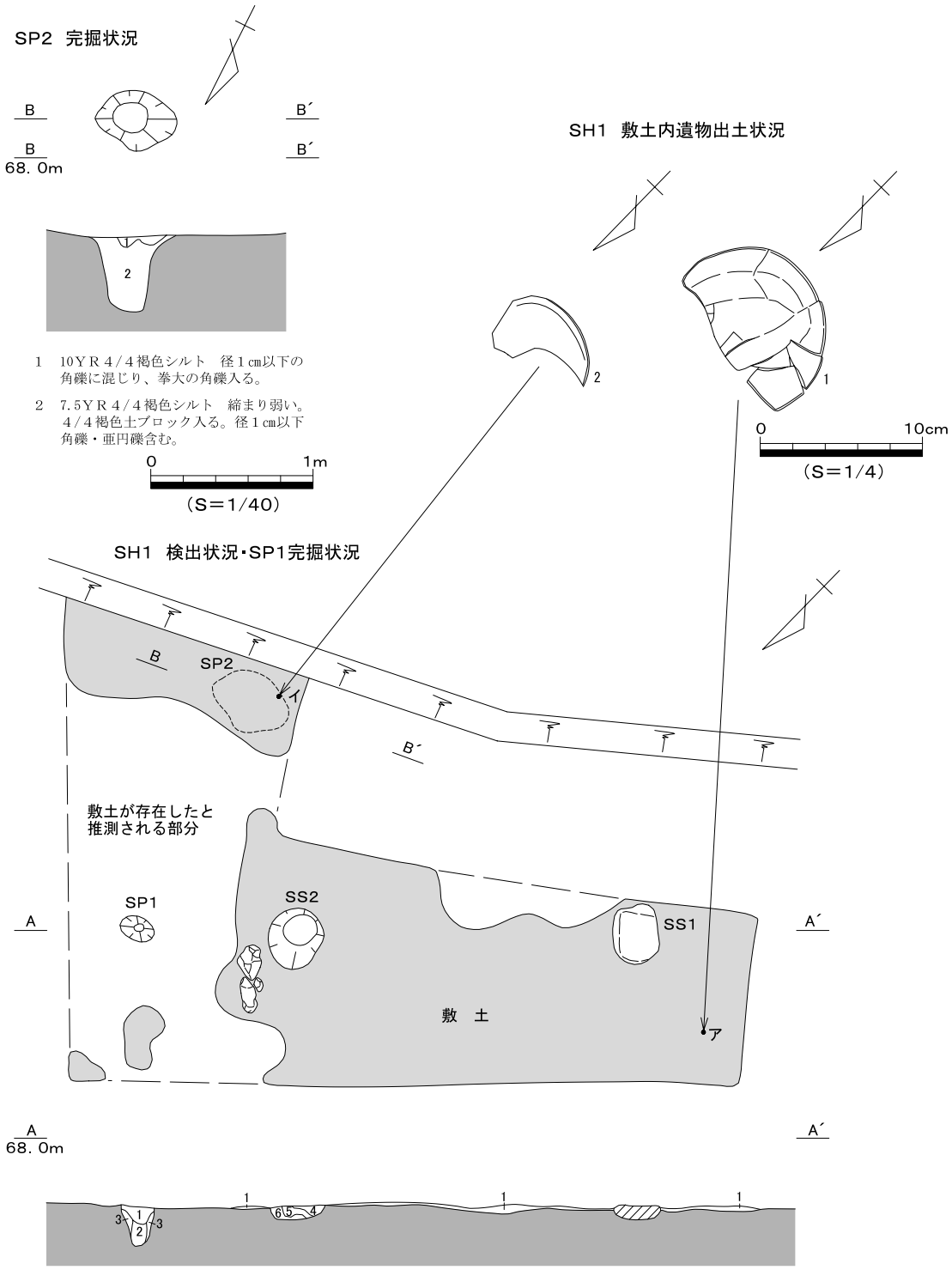
Ｄ５区のⅡ層基底面で検出したテラスをもつ小穴である。時期時期・性格は不明である。

ピット（SP５）

Ｅ４区のⅡ層基底面で検出した不整円形・平底の小穴である。時期時期・性格は不明である。

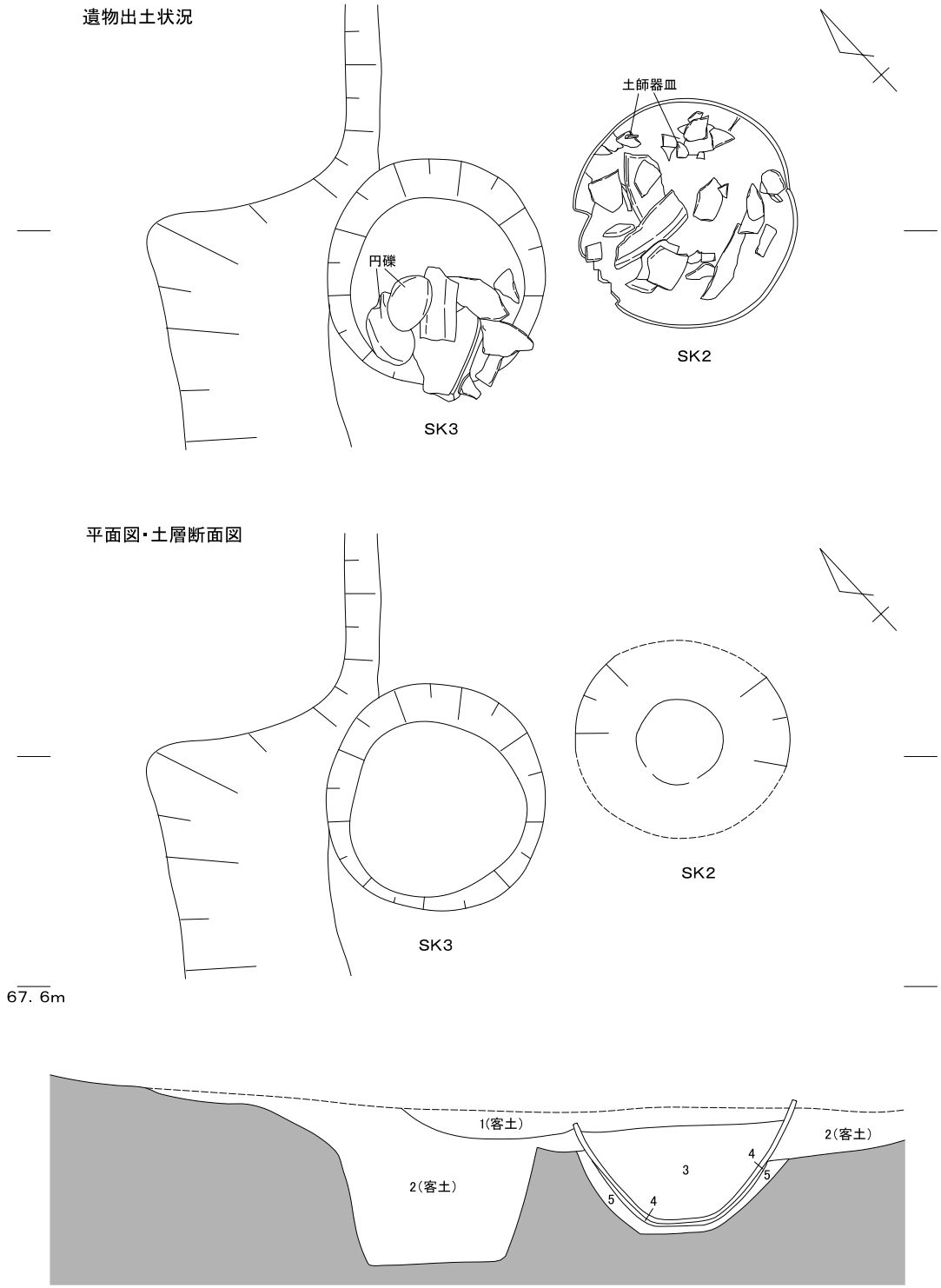
ピット（SP６）

Ｅ４区のⅡ層基底面で検出した楕円形・平底の小穴である。切り合い関係から判断して、SD３・SC１に先行する。時期は近世で、性格は不明である。



1　10ＹＲ４/４褐色シルト　粘性なし。径３cm以下の角礫・円礫含む。
2　10ＹＲ４/４褐色シルト　締まり弱い。径１cm以下の角礫含むも少ない。
3　7.5ＹＲ３/３暗褐色土　締まり弱い。径３cm以下の角礫・亜円礫多く含む。
4　7.5ＹＲ３/３暗褐色土　径３cm以下の角礫・亜円礫に混じり、径10cm程の角礫入る。
5　7.5ＹＲ２/２黒褐色土　径３cm以下の角礫含む。
6　7.5ＹＲ３/２黒褐色土　径１cm以下の角礫含む。

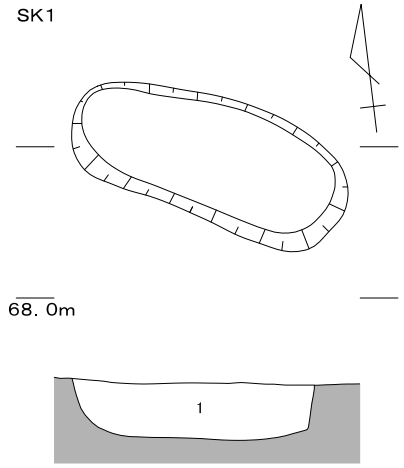
第８図　SH１・SP１・SP２実測図



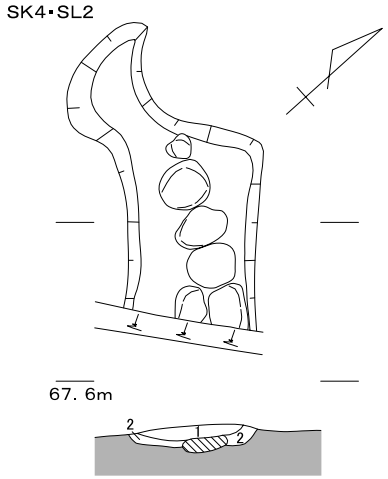
1　7.5ＹＲ３/３暗褐色土　7.5ＹＲ４/４褐色土ブロック入る。径３㎝以下の角礫・円礫含む。（客土）
2　7.5ＹＲ３/２黒褐色土　径３㎝以下の角礫・円礫含む。（客土）
3　7.5ＹＲ３/２黒褐色土　締まり弱い。径３㎝以下の角礫・円礫含む。
4　2.5ＹＲ７/４浅黄色　粘土。
5　7.5ＹＲ４/２暗灰黄色の砂層　礫なし。

0　1m
（S＝1/20）

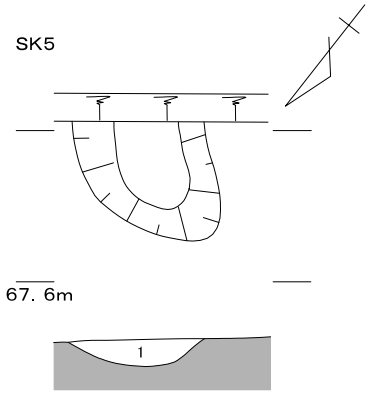
第９図　SK２・SK３実測図



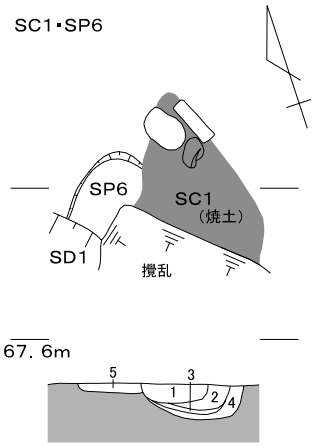
1　7.5ＹＲ３/３ 暗褐色土 7.5ＹＲ５/６褐色土の栗の実大ブロック入り、一部層状となる。径５㎝以下の角礫に混じり径10～20㎝程の円礫入る。



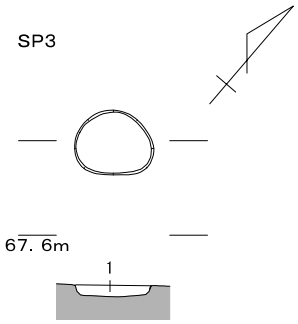
1　10ＹＲ４/６褐色土　締まりあり。径１㎝以下の角礫含む。
2　7.5ＹＲ３/２黒褐色土　径１㎝以下の角礫含む。



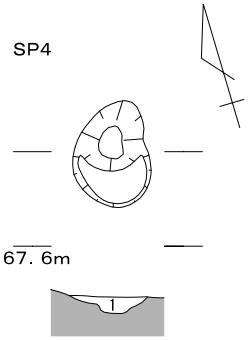
1　7.5ＹＲ３/３暗褐色土　締まり弱い。径１㎝以下の角礫・亜円礫含む。



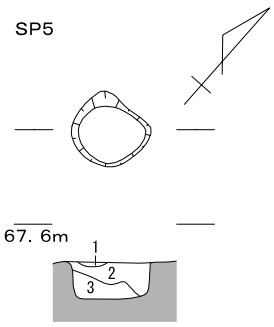
1　５ＹＲ４/８赤褐色土　やや締まる。径３㎝ 以下の角礫含む。炭化物混じる。（焼土）
2　7.5ＹＲ５/８明褐色土　やや締まる。やや粘る。径３㎝以下の角礫含む。炭化物混じる。（焼土）
3　５ＹＲ３/６暗赤褐色土　径１㎝以下の角礫・亜円礫含む。炭化物混じる。（焼土）
4　7.5ＹＲ３/２黒褐色土　径３㎝以下の角礫・円礫含む。炭化物・焼土混じる。
5　7.5ＹＲ３/２黒褐色土　やや締まる。径 3㎝ 以下の角礫・円礫含む。炭化物混じる。



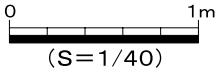
1　7.5ＹＲ３/２黒褐色土　径３㎝以下の角礫含む。



1　7.5ＹＲ３/２黒褐色土　径３㎝以下の角礫含む。



1　7.5ＹＲ４/４褐色土　径１㎝以下の角礫含む。
2　7.5ＹＲ３/２黒褐色土　径３㎝以下の角礫含む。
3　7.5ＹＲ３/３暗褐色土　径５㎝以下の角礫・亜角礫含む。



第10図　その他の土坑実測図

第１表　礎石建物跡一覧

遺構番号	グリッド	検出層位	敷土部平面形	規模（m）				礎石残存	切合関係	遺物有無	備考	挿図
				堀形		柱間						
				梁方向	桁方向	梁行	桁行					
SH１	B７・B８ C７・C８	Ⅱ層 基底面	L 字形	4.14	(2.86)	2.10	―	1	無	有	敷土＝10YR4/4褐色シルト粘性なし。径３㎝以下の角礫・円礫を含む。土師器皿２点出土。	８図

第２表　礎石建物跡関連遺構一覧

遺構番号	グッリド	検出層位	種別	平面形	規模（m）				切合関係	遺物有無	備考	挿図
					上面		底面					
					長軸	短軸	長軸	短軸				
SS１	C７	Ⅱ層 基底面	礎石	円形	0.37	0.28	0.25	0.2	無		根石なし。	８図
SS２	B８	Ⅱ層 基底面	礎石掘形	円形	0.39	0.34	0.17	0.14	無	○	根石と思われる角礫あり。 山茶碗出土。	８図
SP１	B８	Ⅱ層 基底面	ピット	楕円形	0.23	0.14	0.06	0.05	無			８図
SP２	B８	Ⅱ層 基底面	ピット	楕円形	0.38	0.34	0.17	0.13	無	○	土師器皿出土。	８図

第３表　その他の主な遺構一覧

遺構番号	グッリド	検出層位	東西位置	種別	平面形	規模（m）				切合関係	遺物有無	備考	挿図
						上面		底面					
						長軸	短軸	長軸	短軸				
SK１	C７	Ⅱ層 基底面	東側	土坑	楕円形	1.52	0.66	1.39	0.54	無	○	円礫多く入る。 土師器皿・瓦出土。	10図
SK２	F３ G３	Ⅲb 層 基底面	西側	埋設遺構	円形	0.65	(0.65)	0.27	(0.26)	無	○	常滑産甕・土師器皿・近世陶器出土。	９図
SK３	F３	Ⅲb 層 基底面	西側	土坑	円形	0.70	0.65	0.51	0.51	無	○	常滑産甕・土師器皿・近世陶器出土。	９図
SK４ SL２	E４ E５	Ⅱ層 基底面	西側	土坑 石列	不定形	(1.53)	0.79	(1.43)	0.64	無	○	円礫の石列あり。 瓦出土。	10図
SK５	E４ F４	Ⅱ層 基底面	西側	土坑	楕円形か	0.70	(0.59)	(0.42)	0.35	無	○	近世陶器出土。	10図
SC１	E４ F４	Ⅱ層 基底面	西側	焼土遺構	不定形	(1.03)	(0.57)	(0.95)	(0.51)	＞SP6	○	石臼出土。	10図
SP３	D５	Ⅱ層 基底面	西側	ピット	円形	0.42	0.36	0.39	0.33	無			10図
SP４	D５	Ⅱ層 基底面	西側	ピット	不整 楕円形	0.47	0.42	0.17	0.14	無			10図
SP５	E４	Ⅱ基	西側	ピット	不整円形	0.43	0.42	0.36	0.30	無			10図
SP６	E４	Ⅱ基	西側	ピット	楕円形か	(0.45)	(0.30)	(0.31)	(0.29)	＜SC1			10図

第４節　遺物の概要

出土した遺物は破片数で1,736点を数える。内訳は、縄文土器１点、土師器１点、須恵器２点、山茶碗９点、土師器皿132点、古瀬戸陶器４点、瀬戸美濃大窯陶器２点、近世・近代の陶磁器類1,424点、土錘40点、瓦61点、石製品12点、金属製品13点、銭貨５点、その他30点である。出土遺物の主体を占める近世以降の陶磁器類は、その大半が18世紀後半～19世紀の所産である。

出土遺物のなかで注目されるのは、まとまった数の土師器皿が出土したことである。法量は明確に大・中・小があり、口縁径で大10㎝程度、中7.5㎝程度、小６㎝程度である。出土した土師器皿のなかには口縁部に焦げや炭化物の付着が確認できる例が多くあり、これらは灯明皿として用いられていたものと考えられる。陶製の灯明皿は18世紀後半以降のものに限定されることから、土師器皿を用いていた時期は、18世紀後半以前であった可能性が高い。なお、当遺跡で出土した土師器皿を分類すると、調整法と法量の観点から以下のような分類が可能である。生産時期、若しくは用途の違いが想定される。

【土師器皿の分類】

Ⅰ類　薄手につくり、内面に比較的丁寧なナデ調整を施すもの

　Ⅰａ型　　Ⅰ類のうち法量が大型のもの

　Ⅰｃ型　　Ⅰ類のうち法量が小型のもの

Ⅱ類　口縁部に簡単なナデ調整を行うが、内面にあまり調整を加えないもの

　Ⅱａ型　　Ⅱ類のうち法量が大型のもの

　Ⅱｂ型　　Ⅱ類のうち法量が中型のもの

　Ⅱｃ型　　Ⅱ類のうち法量が小型のもの

　Ⅱｃ’型　　Ⅱｃに属するが、器形がコースター形となるもの

もう１つ注目される遺物は土錘である。土錘は投網の周囲に付けられたおもりで、漁具の一種である。土錘は、陶土板を芯棒に巻きつけた後、それを抜き竹輪状につくるものであるが、やはり調整法の違いにより下記のような分類が可能である。

【土錘の分類】

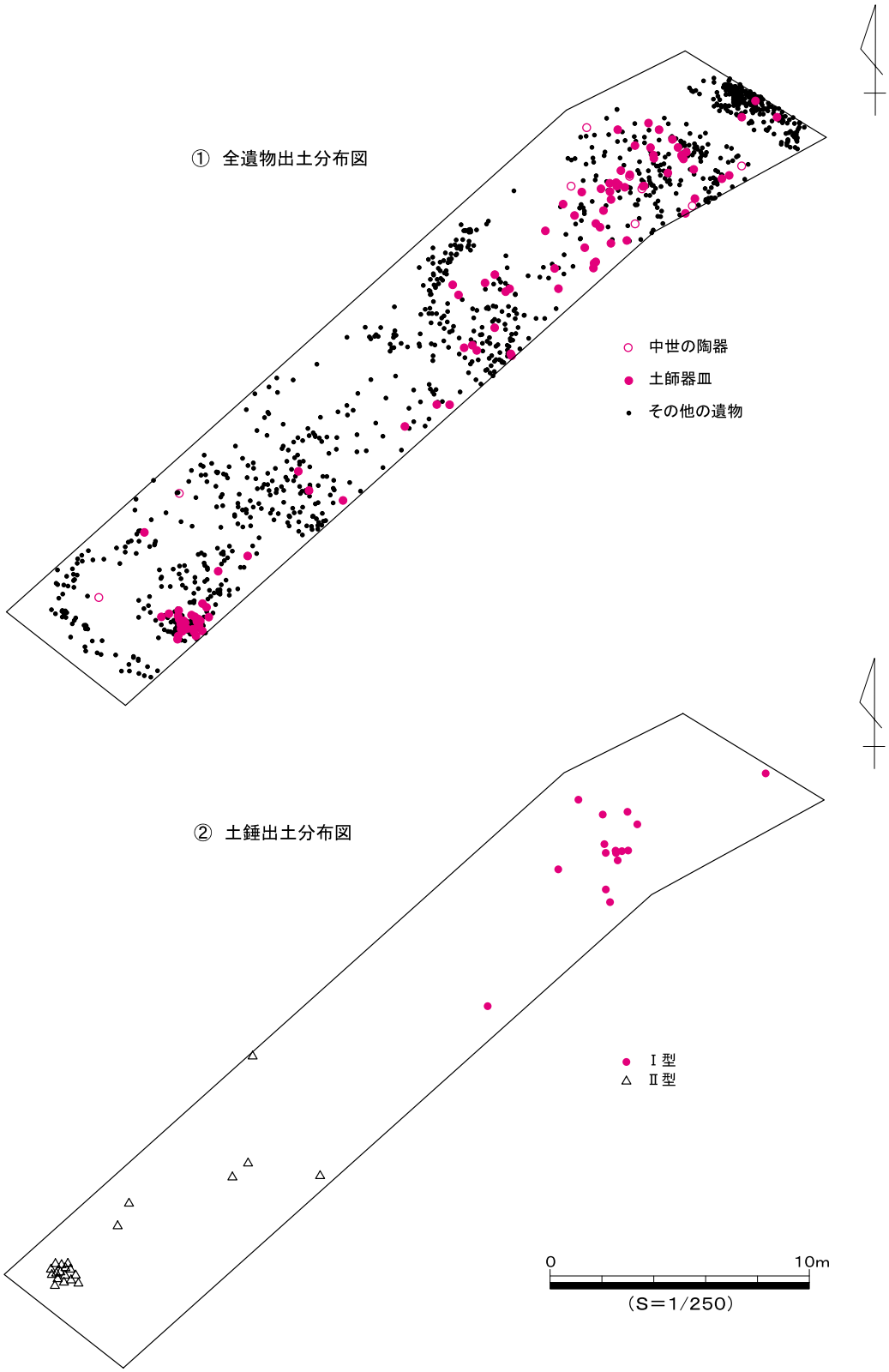
Ⅰ類　つなぎ目を完全にはナデ消さず、両端の調整を略したもの（穿孔が大きい）

Ⅱ類　つなぎ目を完全にナデ消し、両端に面取り調整を行うもの（穿孔が小さい）

なお、図10は、出土遺物分布を示したものである。江戸期以前の遺物（山茶碗・古瀬戸・大窯）や土師器皿の大半が、SL１（地境石列）を境に調査区の東側から出土している事実から、東側の遺構は西側の遺構より古い時期のものである可能性を指摘することできる。また、土錘についても、Ⅰ類とⅡ類とでは、出土分布域が明確に分かれていることから、両者には時期差があると考える。Ⅰ類については中世の遺構から出土した事例が多数報告されており、Ⅱ類に先行するものあることは確実である。Ⅰ・Ⅱ類とも法量に大小がある。

なお、後掲の遺物観察表では、近世陶器のうち、染付・色絵は磁器とともに第６表に、容器状でない土錘と陶製品・土製品はそれぞれ第７表と第８表に、金属製品のうち煙管は第12表に記載した。また、残存率については容器状遺物のみこれを示した。残存率は、口縁部を12分割、底部を４分割し、

分数表記した場合の分子の数値（小数点以下第１位を切り上げた整数）で表記した。



第11図　遺物出土分布図

第５節　遺物

１　遺構の遺物

SH１（１・２）

１・２は手捏ね成形によるⅠａ型の土師器皿で、SH１のア・イの地点よりそれぞれ出土した。器厚は底部で薄く、体部の立ち上がりに伴い厚みを増し、器高の中ほどで最大厚となる。底部が広く、比較的端正なつくりで、規格化された製品と思われる。

SS２（３）

山茶碗小皿の口縁部である。

SK２（４～12）

４は常滑産の甕である。残存状況は良好で、ほぼ完形に近い状態に復元することができた。形態は、口縁部の内端が突出し、口縁外方への屈曲も明瞭となった断面Ｙ字形を呈するものである。内端はあまり肥厚していない。肩の張りは弱く、最大径が上胴部にある。また、あまり高くない温度で焼成されたため焼き上がりは軟質で、かつ器壁に入り込んだ水分の凍結による膨張作用の影響で、器体表面の剥離が広く見られる。内面には丁寧な調整はなく、輪積み痕跡が確認できる凹凸の著しい状態である。口縁部にはナデ調整が施されている。生産時期は、17世紀末～18世紀初頭と推測される。５～10はすべて手捏ね成形による土師器皿である。甕の内部から土師器皿が８点出土し、６点図示した。５はⅡａ型、６～10はⅡｂ型に属するものである。８はほぼ完形で、底部内面周辺にはナデ調整が施され、底部中央に盛り上がりが見られる。７～９は、口縁部に焦げ状の炭化物が付着している。これらは、灯明皿として用いられたものと考えられる。11は染付広東碗の口縁部～体部である。外面に井桁文を描く。12は近世の青磁花生の口縁部である。

SK３（13・14）

13は手捏ね成形によるⅡａ型の土師器皿である。内面底部周辺のナデ調整により、底部中央が盛り上がる。口縁部には焦げが確認できることから、灯明皿として用いられたものと考えられる。14は近世陶器の灰釉皿底部である。見込みに呉須で草文を描く。また、SK３からは、SK２に埋設されていた常滑陶器の甕（４）の口縁部及び胴部上位の破片が出土した。

SK５（15・16）

15は腰錆湯呑の底部を転用した加工円盤である。体部を５方向から打ち欠いている。16は炻器質の染付丸碗である。

SC１（17）

石臼（上臼）である。

SQ１（18～22）

18は常滑産角形火鉢の口縁部である。19は摺絵皿で、見込みには鉄絵が施されている。また、内面底部には重ね焼きの痕跡が確認できる。20は近世陶器擂鉢である。体部はやや反り気味に開き、口縁部は内側に折り返されて玉縁状になる。外面は体部下位をヘラ調整し、上位をナデ調整する。内面は口縁部より５㎝ほど下がった部分に段をもち、摺目は密に入る。21は底に抉り込みのある近世陶器仏餉具の台部である。22は染付磁器で、箱形の水滴である。上部と底部を接合してつくる。上面には菊

文が描かれ、隅に注口をもつ。透明釉はやや青みを呈する。

SD３（23・24）

23は土瓶の口縁部である。口縁部を外側に折り返して偏平な玉縁状につくる。内外面に錆釉を施す。24は柳川鍋の口縁部である。内面は灰釉を施し、外面及び鍔縁は露胎させる。

SL１（25～29）

25・26は盛土内から、27～29は盛土下から出土した遺物である。25は磁器製の色絵小瓶である。26は、土器製焜炉の底部である。楕円形の窓を穿つ。27は完形の土師器皿で、２枚が内容物により付着したまま出土した。２枚の皿の同じ位置に煤の付着が確認でき、灯明具の上皿・受け皿として使用したものと推測される。なお、内容物については未分析であるが、菜種油の可能性が高い。28は飴釉丸碗の底部を転用した加工円盤である。逆台形を呈する削り出し高台で、錆釉を化粧掛けする。29は折縁輪禿鉢である。口縁部に明瞭な稜をもたせて外折させる。

２　遺物包含層の遺物

縄文土器（30）

深鉢の胴部で、胎土に繊維の痕跡が見られる。器厚は0.9㎝を測る。縄文早期後葉に属する。

須恵器（31）

横瓶の体部と思われる。

山茶碗（32～35）

32、33は小皿の口縁部である。32は肉厚で、口縁部を外反させる。34は無高台碗の底部である。35は碗の体部である。下位に穿孔が見られる。

土師器皿（36～42）

36～39は手捏ね成形による土師器皿である。36・37はⅡａ型に属するものでる。36は厚底で、0.9㎝を測る。37は底部周辺にナデ調整が施され、中央が盛り上がる。38はⅡｂ型に属する。39はⅠｃ型、40はⅡｃ型、41はⅡｃ’型に属する。42は轆轤成形による土師器皿の底部である。

古瀬戸陶器（43）

擂鉢の口縁部である。内外に張り出す口縁帯の高さがほぼ揃うもので、後Ⅳ古に属する。

瀬戸美濃大窯陶器（44・45）

44は丸皿の底部である。45は折縁皿である。体部から口縁部まで均等に厚く、口縁端部を玉縁状につくる。

近世陶器（46～90）

46～49は碗若しくは湯呑である。46は炻器質の柳茶碗である。削り出しの高台脇から、体部を直線的に立ち上げる。47は灰釉小碗である。48・49は染付陶器である。48は陶器質の丸碗である。49は炻器質の染付広東碗である。

50～54は皿である。50は菊皿の口縁部である。51は輪禿皿で、見込みに16弁の菊絵をスタンプする。52は卸皿である。卸目の間隔は約0.3㎝で、全面施釉する。53・54は、それぞれ陶器質・炻器質の染付小皿である。

55～58は鉢である。55は折縁輪禿鉢で、口縁部を緩やかに外折させる。56は灰釉鉢で、わずかに外

折した口縁部を外側に折り返して玉縁状につくる。体部上位に灰釉を漬け掛けする。57は灰釉鉄絵鉢である。玉縁状口縁の外側に明瞭な稜をもたせる。外面には草花文を描く。58は長石釉鉄絵の鉢、若しくは片口である。ほぼ直立させた口縁部を内側に折り返して丸くつくり、外面直下に１条の沈線を巡らす。

59～63は擂鉢である。59は口縁部を外側に折り返し縁帯をつくる。60は口縁部と体部との境で大きくくびれて明瞭な段をつくり、外面に縁帯を形成する。61は内面にわずかな段をもつが、外面に縁帯はない。口縁端部が面取りされている。62は19（SQ１出土）と同じ型式のものである。63は底部に同心円状の摺目が施されている。

64～67は練鉢である。64は口縁を外折して上端部を平坦につくる。65は外側に折り返して玉縁状にした口縁部を内向させている。外面下位を露体させる。まで66は口縁を外側下方に丸く垂れ下げ、体部上位に３条の平行沈線を巡らす。67は浅く削り出した蛇の目高台をもつ。底部内面には重ね焼きの痕跡が確認できる。

68～72は蓋である。68・69は被せ蓋、70・71は落とし蓋、72は碗蓋である。68は笠部上面中央に宝珠摘みをもつ。69は蓋物の蓋である。70は炻器質の汁次の蓋である。70・71は共に紐状摘みを欠損している。72は上面は摘み内部を除き飴釉を刷毛塗りする。また、下面も端部から３分の１までを施釉する。

73・74は徳利である。73は長胴形で、全面に灰釉を施す。74は胴部中位に最大径を有する。底部中央を除き全面に灰釉を施し、肩に鉄釉を流し掛けする。

75は陶器鍋の底部である。外面下位は露胎する。

76～81は灯明具である。76・77は灯明皿（上皿）、78・79は灯明受付皿（下皿）である。79は受部に切立状の油溝をもつ。80は秉燭である。坏部の形は球状となり、底部中央付近に円錐形の穿孔を穿つ。底部を除き飴釉を施す。81はカンテラである。貫入に油染みを確認できる。

82は仏具の筒型香炉である。口縁端部は水平な平坦面となり、三足を体部下端に接合している。

83～90は瀬戸・美濃産のその他の陶器類である。83は餌猪口で、体部の一箇所に環摘みをもつ。84は鶴の玩具で、頸部・胴体部・両翼部の４つの部品を接合してつくる。85～90は投網用の土錘で、85・86・87はⅠ類、88・89はⅡ類である。土錘はこのほかに35点出土した。Ⅰ・Ⅱ類とも法量に大小があり、質量は大型が15ｇ前後、小型が８ｇ前後である。おそらく大型は四匁、小型は二匁の規格で生産されたものであろう。

90は産地不明の甕で、２個体の底部同士が熔着している。内面に施釉はない。

磁器（91～96）

91～93は肥前産の染付磁器で、91は丸碗、92は箱形湯呑の底部、93は小瓶の胴部である。94～96は瀬戸・美濃産の染付磁器で、94は小瓶、95は仏餉具、96は段重である。

土師器（97）

97は焙烙である。体部に口縁部を接続し、外面の体部下位～底部に墨を塗布している。

土製品（98）

土鈴である。このほかに、もう１点出土した。

瓦器（99）

火鉢の口縁部である。口縁は急激に内向させ、２つの穿孔を段違い穿つ。外面を横方向に磨く。

瓦（100～102）

100・101は有文の軒桟瓦である。102は大棟、若しくは下り棟の端部の鬼瓦であろう。面に線刻が確認できる。

石製品（103～105）

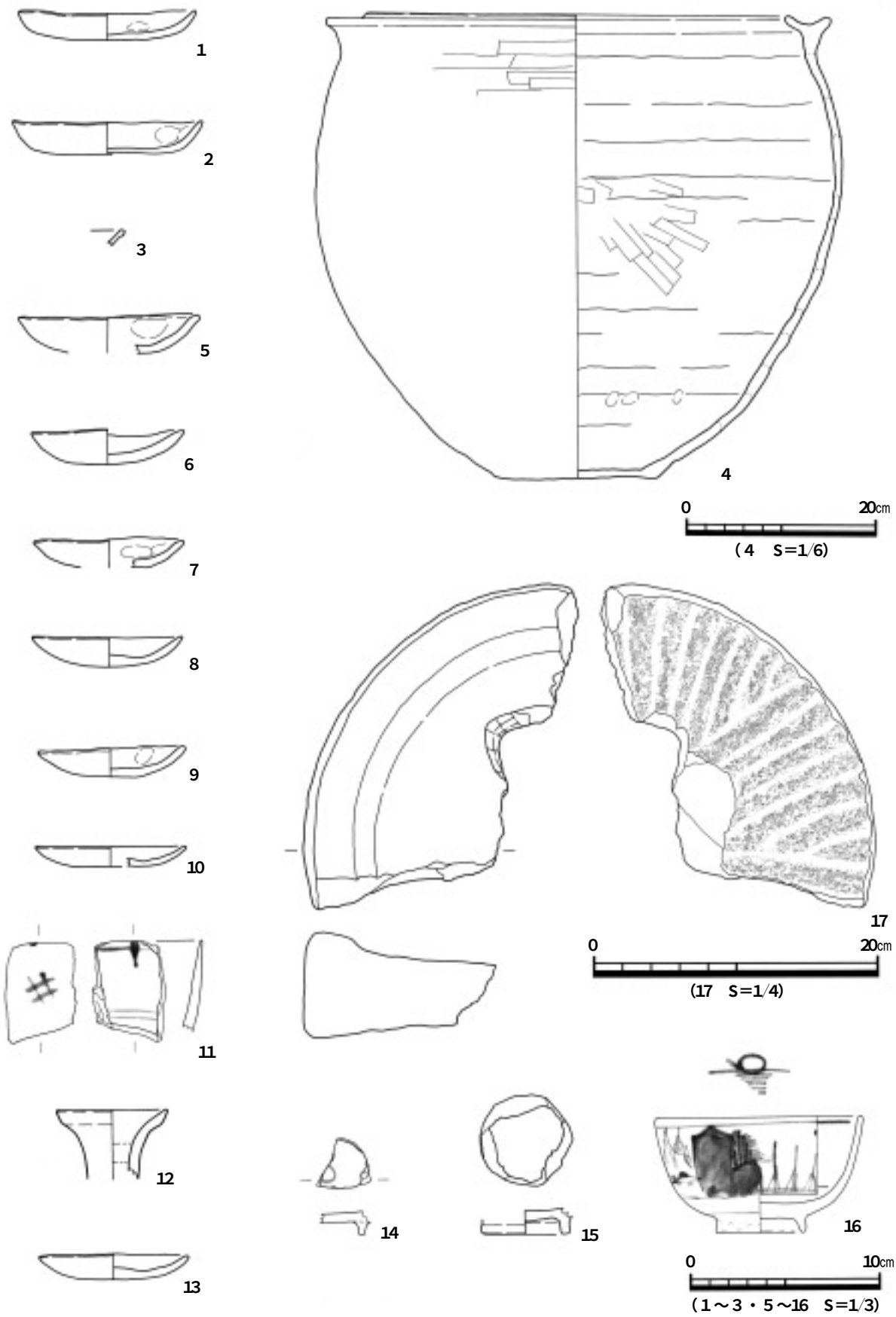
硯を転用した砥石である。104・105は、それぞれ石臼の下臼・上臼である。

金属製品（106～109）

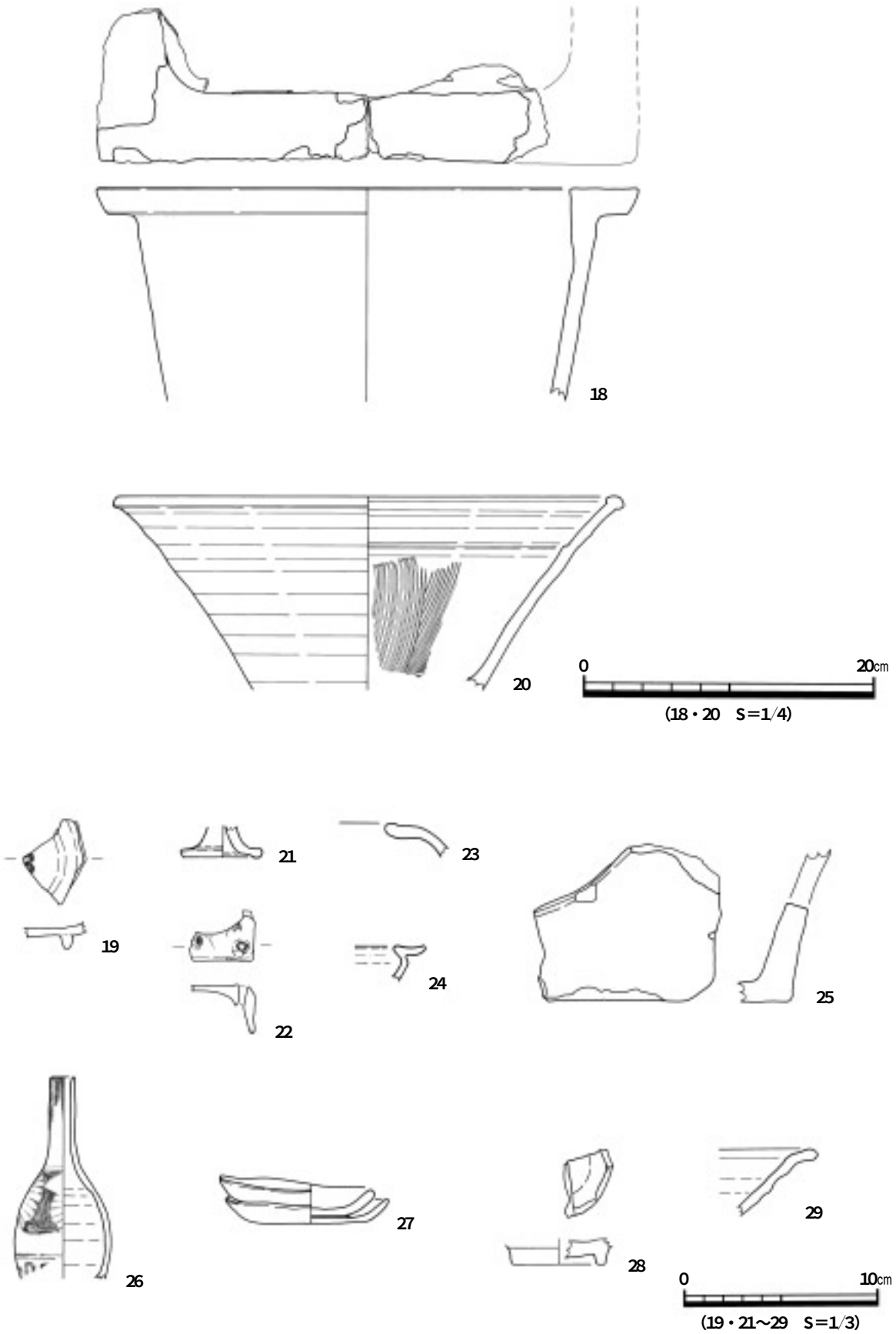
106は鉄鎌である。刃部を折損している。107は銅製の釣針で、断面は角形である。108・109は、それぞれ煙管の雁首・吸口である。両者が対のものか、否かは不明である。雁首は、肩付部や補強帯が見られず、脂返しの湾曲が緩やかな点から判断して19世紀の所産と判断した。

銭貨（110～114）

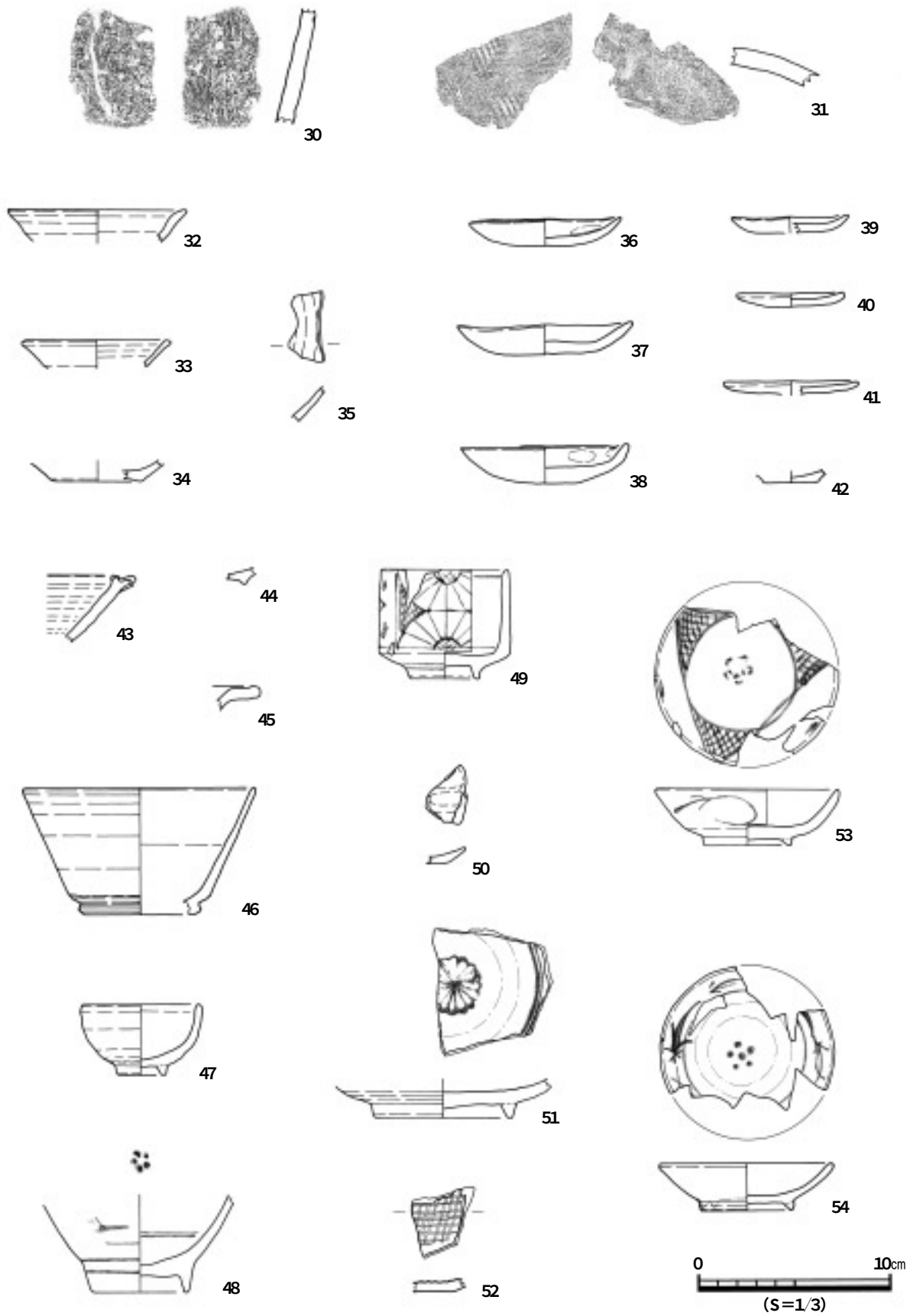
銭貨は５点出土した。すべて寛永通寶で、110～112は古寛永、113・114は新寛永である。


1
2
3
5
6
7
8
9
10
11
12
13
4
0
20cm
（4　S＝1/6）
17
0
20cm
（17　S＝1/4）
14
15
16
0
10cm
（1～3・5～16　S＝1/3）

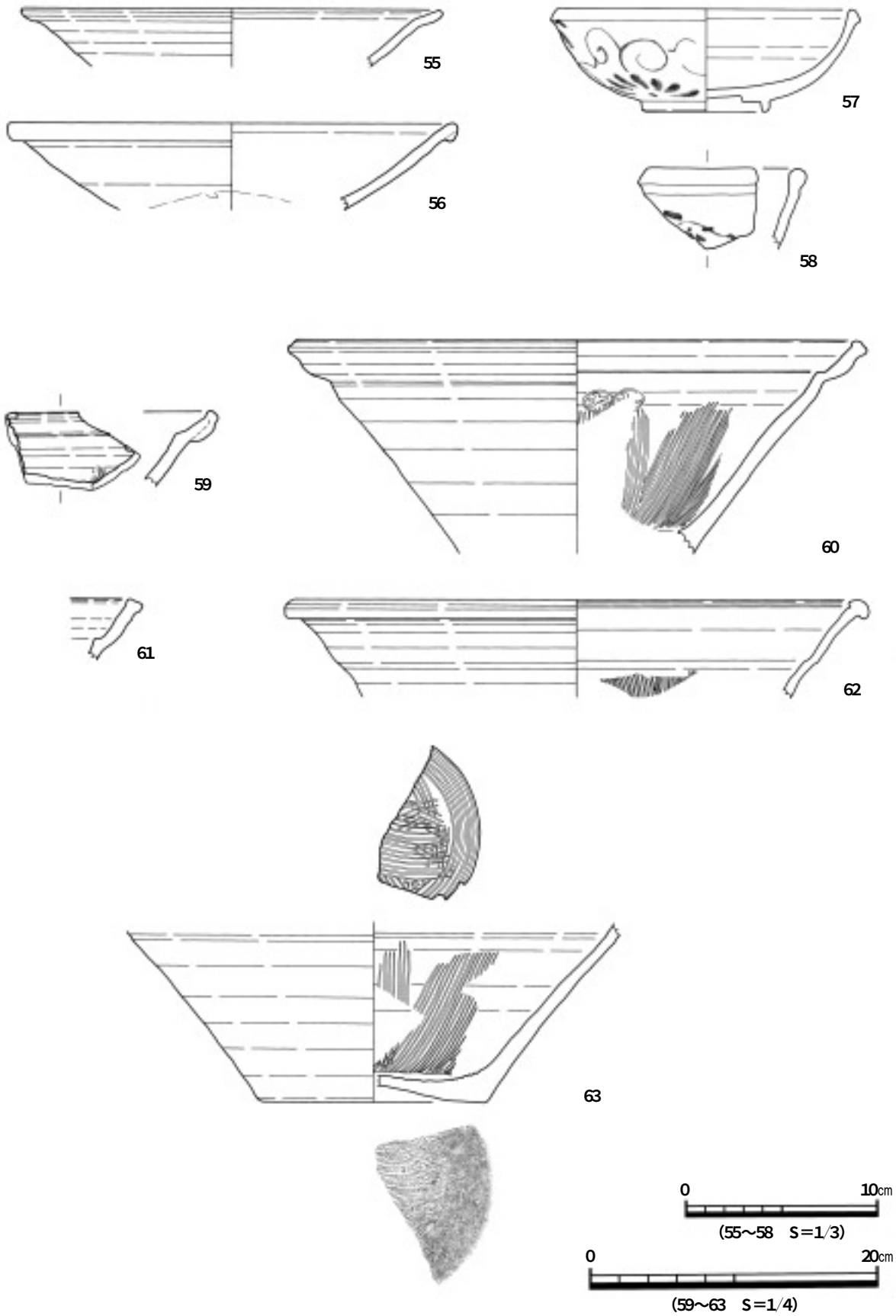
第12図　遺構の遺物（１）


18
20
0
20cm
(18・20　S＝1/4)
19
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm
(19・21～29　S＝1/3)

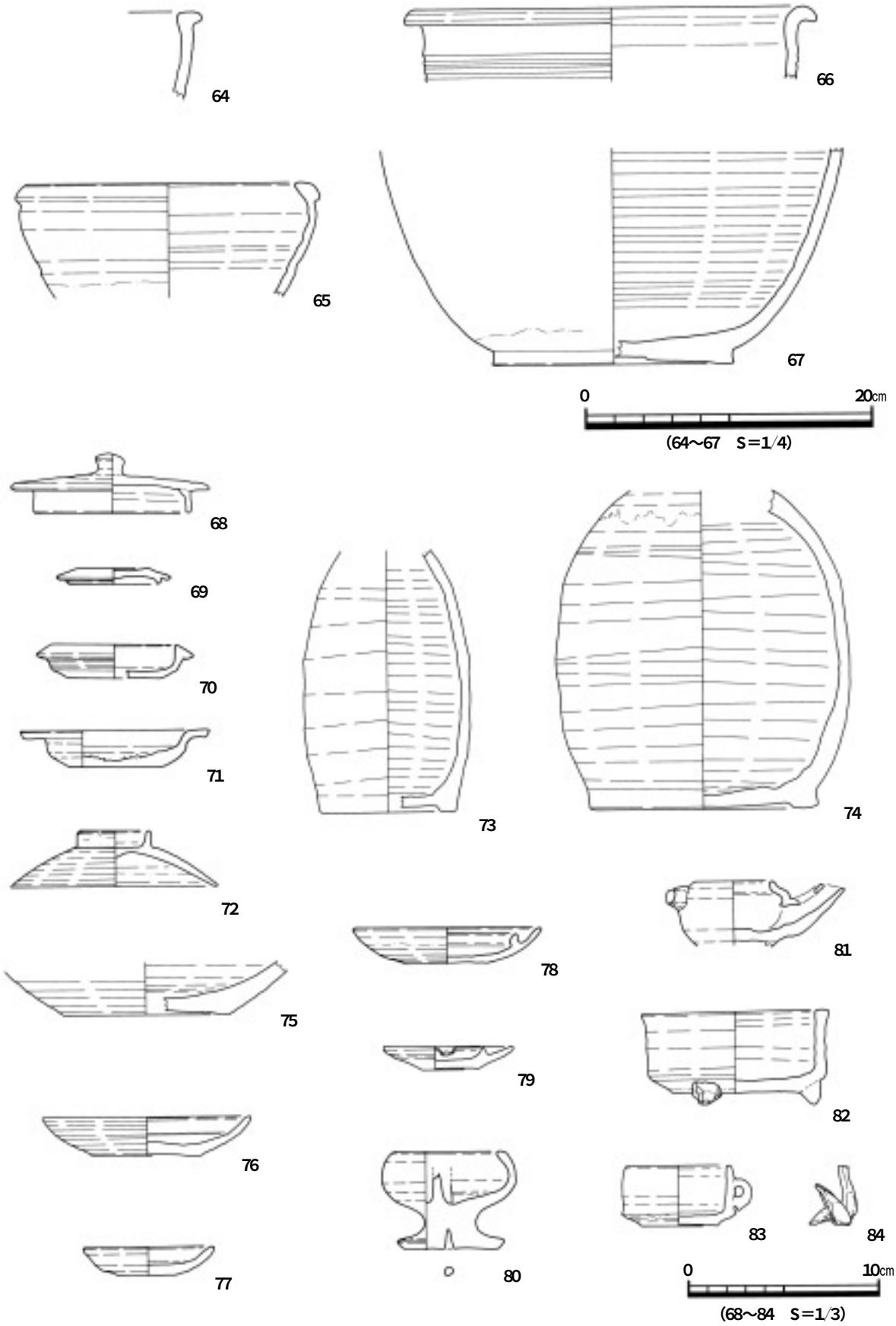
第13図　遺構の遺物（２）



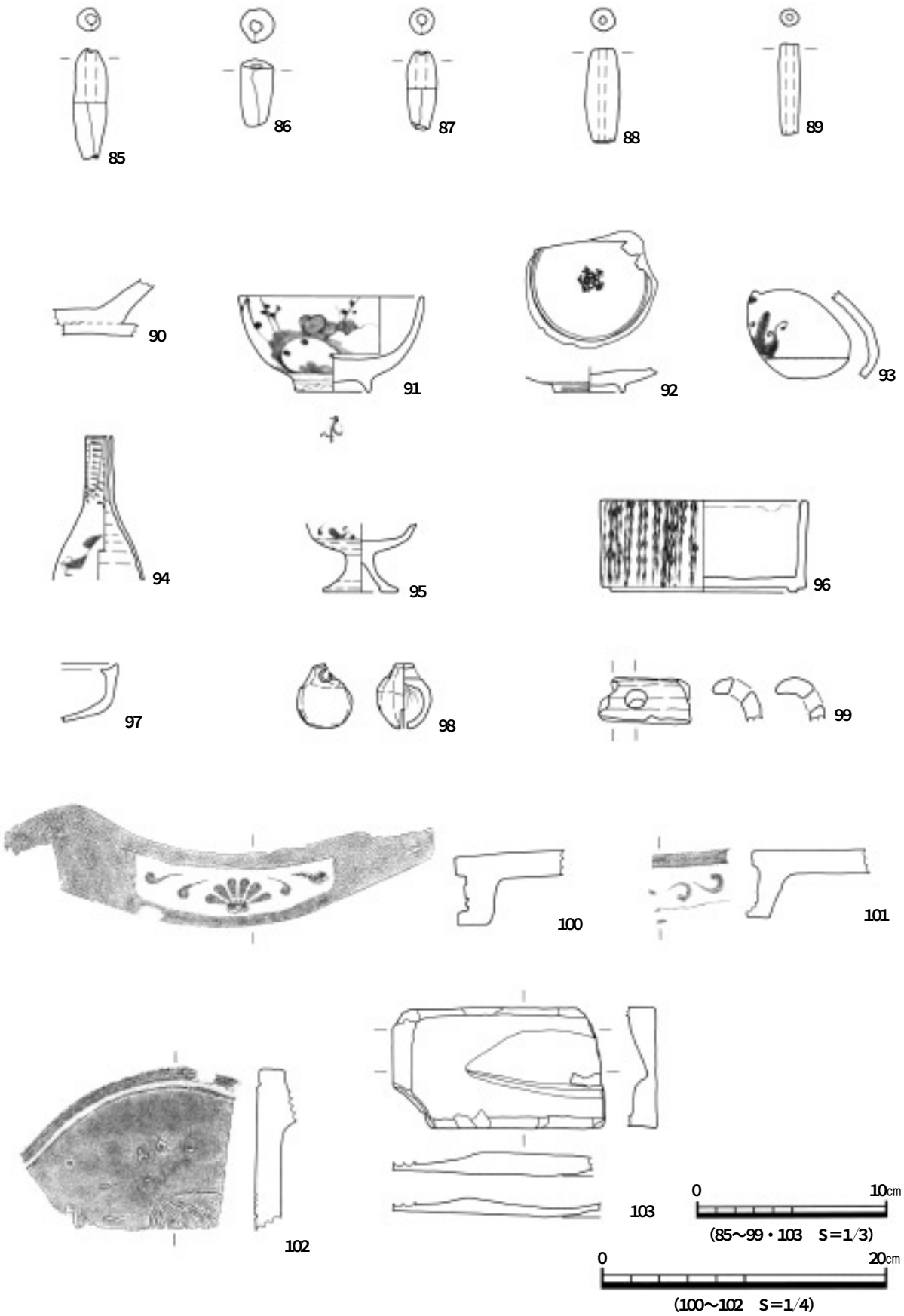
第14図　包含層の遺物（１）



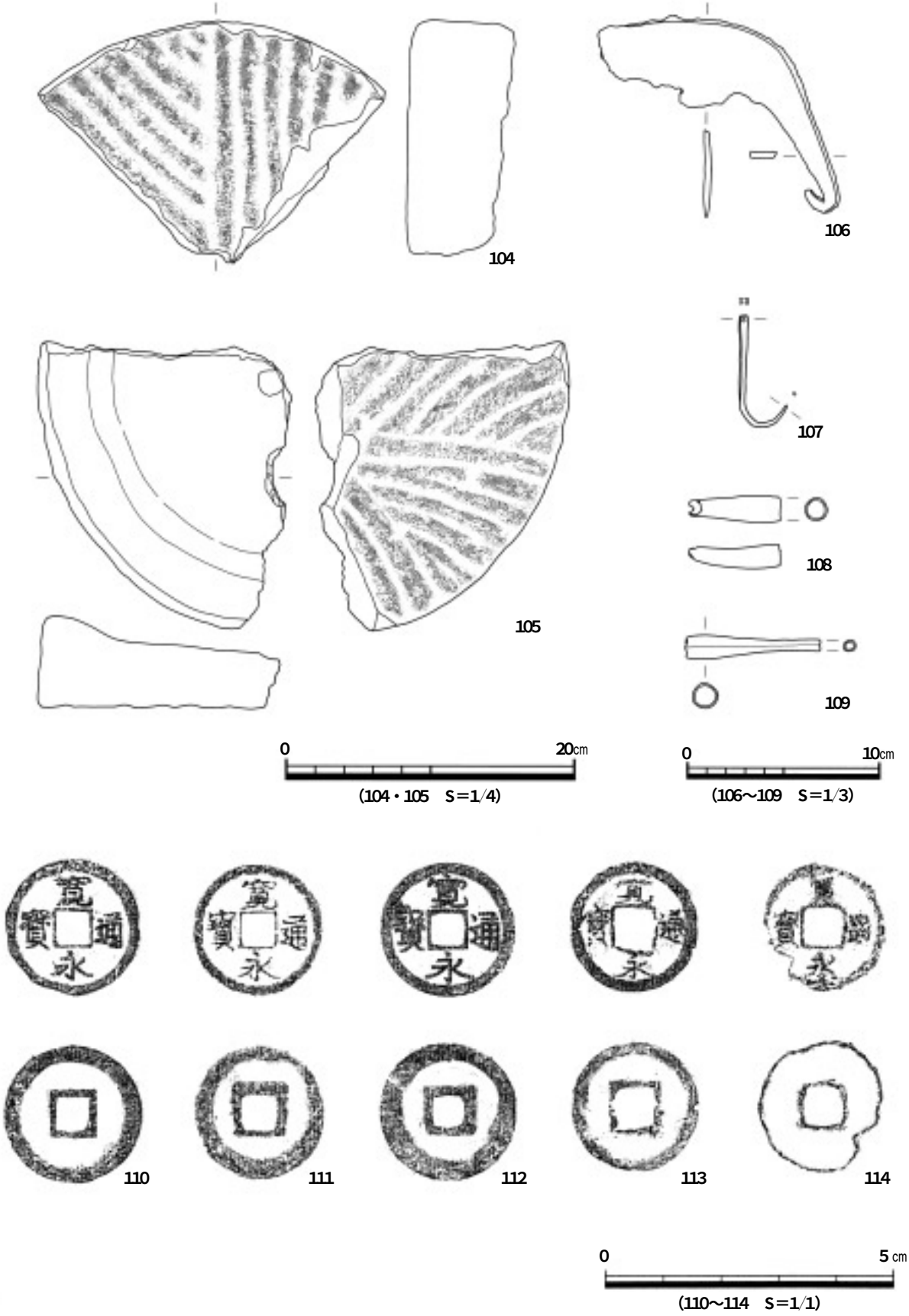
第15図　包含層の遺物（２）



第16図　包含層の遺物（３）



第17図　包含層の遺物（４）



第18図　包含層の遺物（５）

第４表　土器観察表（染付・色絵・青磁を除く）

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	種別	器種	法量（㎝）			残存率		胎土	焼成	成形・調整	釉薬	産地	時期	備考
							口径	器高	底径	口縁	底部							
1	12	6	－	SH１	土師器	小皿	9.3	1.6	4.1	8	2	密	良好	手捏ね。内面ナデ。	－			Ⅰａ型
2	12	6	－	SH１	土師器	小皿	10.1	1.8	7.8	3	1	密	良好	手捏ね。内面ナデ。	－			Ⅰａ型
3	12	8	－	SS２	山茶碗	小皿	－	－	－	1	－	密	良好	口縁端部面取り状調整。内外面ナデ。	－	東濃産	７形式以降	
4	12	6	－	SK２	陶器	甕	70.6	65.8	22.5	12	4	稍粗	稍不良	内外面ヘラ削りの後、口縁部ナデ。	－	常滑	17C 末～18C 初頭	赤もの
5	12	6	－	SK２	土師器	小皿	9.6	2.0	－	7	3	稍粗	良好	手捏ね。口縁部ナデ。内面に指圧痕。	－			Ⅱａ型
6	12	6	－	SK２	土師器	小皿	8.1	1.8	－	7	5	稍粗	良好	手捏ね。口縁部ナデ。	－			Ⅱｂ型
7	12	6	－	SK２	土師器	小皿	7.8	1.6	－	7	1	密	良好	手捏ね。口縁部ナデ。内面に指圧痕。	－			Ⅱｂ型
8	12	6	－	SK２	土師器	小皿	8.0	1.7	－	8	4	密	良好	手捏ね。口縁部・底部内面ナデ。	－			Ⅱｂ型
9	12	6	－	SK２	土師器	小皿	7.8	1.7	－	6	2	密	良好	手捏ね。口縁部ナデ。	－			Ⅱｂ型
10	12	6	－	SK２	土師器	小皿	(8.0)	1.1	－	3	1	密	良好	口縁部・底部内面ナデ。	－			Ⅱｂ型
13	12	6	－	SK３	土師器	小皿	(7.9)	1.3	－	3	1	稍粗	良好	手捏ね。口縁・底部内面ナデ。	－			Ⅱｂ型
14	12	5	－	SK３	陶器	皿	－	－	－	－	1	稍粗	良好	内面・高台部ナデ。	灰釉	瀬戸	連房１段階	御深井製品
15	12	6	－	SK５	陶器	加工円盤	－	－	4.6	－	4	稍粗	良好	高台部ナデ。	内灰釉外錆釉	美濃	８～９小期	高台内部に施釉あり。
18	13	6	－	SQ１	陶器	角形火鉢	(37.2)	－	－	3	0	密	稍不良	外面ナデ。内面ヘラ。	－	常滑	幕末頃か	
19	13	5	－	SQ１	陶器	摺絵皿	－	－	(6.2)	－	1	密	良好	底部ヘラ削りの後、ナデ。付け高台。	灰釉	美濃	連房２段階	
20	13	6	－	SQ１	陶器	擂鉢	(34.3)	－	－	1	－	密	良好	口縁部～体部上位ナデ。体部外面下位ヘラ削り。	錆釉	美濃	11小期	
21	13	6	－	SQ１	陶器	仏餉具	－	－	4.0	－	4	密	良好	内外面ナデ。	灰釉	美濃	10～11小期	坏部欠損。
23	13	6	－	SD３	陶器	土瓶	－	－	－	1	－	密	良好	ヘラ削りの後、ナデ。	錆釉	美濃	８小期	
24	13	8	－	SD３	陶器	柳川鍋	－	－	－	1	－	密	良好	外面ヘラ削り。鍔縁部・内面ナデ。	灰釉	美濃	連房３段階	
25	13	6	－	SL１盛土内	土器	焜炉	－	－	－	－	1	稍粗	良好	内外面ナデ。	－		幕末頃か	
27	13	6	－	SL１盛土下	土師器	小皿（上）	7.9	2.4	－	12	4	密	良好	手捏ね。口縁部ナデ。	－			付着状態の器高。
					土師器	小皿（下）	8.4	2.4	－	12	4	密	良好	手捏ね。口縁部ナデ。	－			上の皿と付着。
28	13	6	－	SL１盛土下	陶器	加工円盤	－	－	4.8	－	4	密	良好	高台部削り出しの後、ナデ。	飴釉	瀬戸	５小期	
29	13	6	－	SL１盛土下	陶器	折縁輪禿鉢	－	－	－	1	－	密	良好	内外面ナデ。	灰釉	美濃	７小期	
30	14	7	F３	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	－	－	稍粗	良好	不明。	－		縄文早期後葉	
31	14	7	B８	Ⅱ層	須恵器	横瓶	－	－	－	－	－	稍粗	良好	内外面ナデ。	－			
32	14	7	F２	Ⅱ層	山茶碗	小皿	(9.4)	－	－	1	－	密	良好	内外面ナデ。	－	東濃産	４型式	
33	14	7	B８	Ⅱ層	山茶碗	小皿	(7.8)	－	－	1	－	密	良好	内外面ナデ。	－	東濃産	７形式以降	
34	14	7	B８	Ⅱ層	山茶碗	碗	－	－	(4.6)	－	1	密	良好	内外面ナデ。底部糸切り。	－	東濃産	11型式（脇之島）	無高台碗
35	14	7	E３	Ⅱ層	山茶碗	碗	－	－	－	－	－	密	良好	内外面ナデ。	－	東濃産	９形式以降	穿孔あり。
36	14	7	B８	Ⅱ層	土師器	小皿	8.8	2.1	－	5	4	稍粗	良好	手捏ね。口縁部ナデ。	－			Ⅱａ型
37	14	7	B７	Ⅱ層	土師器	小皿	9.1	1.7	－	4	1	密	良好	手捏ね。口縁部・内面底部ナデ。	－			Ⅱａ型
38	14	7	B８	Ⅱ層	土師器	小皿	7.9	1.5	－	4	2	稍粗	良好	手捏ね。口縁部ナデ。内面に指圧痕。	－			Ⅱｂ型
39	14	7	B７	Ⅱ層	土師器	小皿	6.1	0.9	3.3	6	1	密	良好	手捏ね。内面ナデ。	－			Ⅰｃ型
40	14	7	B８	Ⅱ層	土師器	小皿	5.6	0.8	－	7	2	密	良好	手捏ね。口縁部ナデ。	－			Ⅱｃ型
41	14	7	E５	Ⅱ層	土師器	小皿	(7.0)	0.6	－	2	1	密	良好	手捏ね。内面ナデ。	－			Ⅱｃ’型
42	14	8	D５	Ⅱ層	土師器	小皿	－	－	(2.9)	－	1	密	良好	轆轤成形。底部回転糸切り（右）。	－			
43	14	7	B８	Ⅱ層	古瀬戸	擂鉢	－	－	－	1	－	密	良好	内外面回転ヘラ削りの後、ナデ。	錆釉		後Ⅳ古	
44	14	7	B７	Ⅱ層	大窯	小皿	－	－	－	－	1	密	良好	内外面ナデ。	灰釉		１～２段階	

第５表　土器観察表（染付・色絵・青磁を除く）

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	種別	器種	法量（cm）			残存率		胎土	焼成	成形・調整	釉薬	産地	時期	備考
							口径	器高	底径	口縁	底部							
45	14	7	E５	Ⅱ層	大窯	折縁皿	－	－	－	2	－	密	良好	内外面ナデ。	灰釉		４段階後半	
46	14	7	A８	Ⅰ層	陶器	柳茶碗	(12.0)	6.5	5.7	2	1	密	良好	内面ナデ。外面ヘラ削りの後、ナデ。高台削り出し。	灰釉	美濃	８小期	炻器質
47	14	7	A８	Ⅱ層	陶器	小碗	6.1	3.7	2.5	4	4	密	良好	ヘラ削りの後、ナデ。	灰釉	美濃	９小期	
50	14	5	C７	Ⅱ層	陶器	菊皿	－	－	－	1	－	密	良好	ヘラ削りの後、ナデ。	灰釉	美濃	連房１段階	
51	14	5	E３	Ⅱ層	陶器	輪禿皿	－	－	7.1	－	1	密	良好	外面ヘラ削りの後、ナデ。底部ヘラ削り。付け高台。	灰釉	美濃	７小期	見込みに菊文あり。
52	14	7	A８	Ⅱ層	陶器	卸皿	－	－	－	－	1	稍粗	良好	底部・外面ヘラ削りの後、ナデ。	錆釉	瀬戸	８小期	
55	15	7	B７	Ⅱ層	陶器	折縁輪禿鉢	(22.0)	－	－	1	－	密	良好	内面ナデ。外面ヘラ削りの後、ナデ。	灰釉	美濃	７小期	
56	15	7	A９	Ⅱ層	陶器	折縁輪禿鉢	23.5	－	－	2	－	密	良好	内面ナデ。外面ヘラ削りの後、ナデ。	灰釉	美濃	７小期	
57	15	5	C６	Ⅰ層	陶器	灰釉鉄絵鉢	15.0	5.4	6.4	3	1	密	良好	内面ナデ。外面ヘラ削りの後、ナデ。高台部削り出しの後、ナデ。	灰釉	美濃	11小期	草花文
58	15	5	C６	Ⅱ層	陶器	長石釉鉄絵鉢	－	－	－	1	－	密	良好	内外面ナデ。	長石釉	美濃	連房２段階	片口か。
59	15	7	B７	Ⅱ層	陶器	擂鉢	－	－	－	1	－	密	良好	内外面ナデ。	錆釉	瀬戸	５小期	
60	15	7	A８	Ⅱ層	陶器	擂鉢	38.8	－	－	1	－	密	良好	内面ナデ。外面ヘラ削りの後、口縁部ナデ。	錆釉	瀬戸	８小期	
61	15	7	B８	Ⅱ層	陶器	擂鉢	－	－	－	1	－	密	良好	内面ナデ。外面ヘラ削りの後、ナデ。	錆釉	瀬戸	10小期	
62	15	7	B７	Ⅱ層	陶器	擂鉢	39.2	－	－	2	－	密	良好	内面ナデ。外面ヘラ削りの後、上位をナデ。	錆釉	瀬戸	11小期	
63	15	7	B８	Ⅱ層	陶器	擂鉢	－	－	(15.6)	－	1	密	良好	内面ナデ。外面ヘラ削り。底部糸切りの後、周囲をヘラ調整。	錆釉	瀬戸	８小期	摺目は１単位16条で、幅5.4cm。
64	16	7	E３	Ⅱ層	陶器	練鉢	－	－	－	1	－	密	良好	内外面ナデ。	灰釉	美濃	８小期	
65	16	7	C５	Ⅰ層	陶器	練鉢	(20.0)	－	－	2	－	稍粗	良好	内外面ナデ。	黄釉	美濃	11小期	
66	16	7	E４	Ⅲ層	陶器	練鉢	(27.0)	－	－	1	－	密	良好	内外面ナデ。	柿釉	瀬戸	11小期	
67	16	7	D５	Ⅱ層	陶器	練鉢	－	－	17.0	－	2	密	良好	内外面ナデ。削り出し蛇の目高台。	黄釉	瀬戸	11小期	
68	16	8	D４	Ⅱ層	陶器	被せ蓋	8.3	3.1	－	12	－	密	良好	上面回転ヘラ削りの後、端部ナデ。下面ナデ。	錆釉	美濃	８小期	
69	16	8	F３	Ⅱ層	陶器	蓋物の蓋	5.0	0.9	－	6	－	稍粗	良好	上面ヘラ削りの後、ナデ。下面ナデ。	灰釉	美濃	10～11小期	
70	16	8	A８	Ⅱ層	陶器	落とし蓋	7.0	1.7	－	12	－	密	良好	上面ナデ。下面ヘラ削りの後、ナデ。	灰釉	美濃	10～11小期	摘み部欠損。
71	16	8	E４	Ⅲ層	陶器	落とし蓋	7.3	1.9	－	12	－	稍粗	良好	上面ナデ。下面糸切り。側面ヘラ削りの後、ナデ。	長石釉	美濃	10～11小期	紐状摘み部欠損。
72	16	8	－	Ⅰ層	陶器	碗蓋	10.8	3.0	－	5	－	密	良好	上下面ナデ。	錆釉	不明	幕末～明治	
73	16	7	B８	Ⅱ層	陶器	徳利	－	－	(7.1)	－	2	密	良好	胴部ヘラ削りの後、ナデ。浅い削り出し高台。	灰釉	美濃	８～９小期	
74	16	7	B８	Ⅱ層	陶器	徳利	－	－	12.0	－	2	稍粗	良好	胴部ヘラ削りの後、ナデ。浅い削り出し高台。	灰釉	瀬戸	10～11小期	鉄釉流し
75	16	8	F３	Ⅲ層	陶器	鍋	－	－	(8.7)	－	1	稍粗	良好	内面ナデ。外面・底部ヘラ削り。	錆釉	美濃	連房３段階	
76	16	8	B８	Ⅱ層	陶器	灯明皿	(11.0)	2.0	5.6	3	1	稍粗	良好	内面ナデ。外面・底部ヘラ削りの後、口縁部のみナデ。	錆釉	美濃	10～11小期	内面中位に沈線あり。
77	16	8	C６	Ⅱ層	陶器	灯明皿	6.8	1.5	3.0	12	4	密	良好	内面ナデ。外面・底部ヘラ削りの後、ナデ。	錆釉	美濃	10～11小期	完形
78	16	8	B８	Ⅱ層	陶器	灯明受付皿	(9.8)	1.9	4.4	2	2	密	良好	内面ナデ。外面・底部ヘラ削りの後、ナデ。	灰釉	美濃	10～11小期	
79	16	8	B７	Ⅱ層	陶器	灯明受付皿	6.7	1.2	2.9	12	4	密	良好	内面ナデ。外面・底部ヘラ削りの後、ナデ。	灰釉	美濃	10～11小期	完形
80	16	4	－	Ⅰ層	陶器	秉燭	(5.4)	5.1	4.9	1	4	稍粗	良好	杯部ヘラ削りの後、ナデ。底部回転糸切り。	飴釉	美濃	９小期	芯立部欠損。
81	16	4	D５	Ⅱ層	陶器	カンテラ	4.0	－	－	12	－	密	良好	外面ナデ。底部ヘラ削りの後、脚を付ける。	灰釉	瀬戸	10～11小期	後手部・高台部欠損。
82	16	6	A９	Ⅱ層	陶器	筒形香炉	9.7	4.9	5.6	8	4	密	良好	内面ナデ。外面・底部ヘラ削りの後、ナデ。	灰釉	美濃	８小期	
83	16	8	－	Ⅰ層	陶器	餌猪口	5.4	3.2	4.0	5	2	密	良好	内外面ナデ。底部回転糸切り。	灰釉	美濃	10～11小期	
90	17	4	C５	Ⅰ層	陶器	甕	－	－	－	－	1	密	良好	内面ナデ。外面ヘラ削りの後、ナデ。	飴釉	信楽か	江戸時代	２個体熔着。
97	17	8	C５	Ⅰ層	土師器	焙烙	－	－	－	－	1	稍粗	良好	口縁部・内面を横ナデ。外面は無調整。	－		江戸時代	
99	17	8	B８	Ⅱ層	瓦器	火鉢	－	－	－	－	1	密	良好	外面ナデ。	－			

第６表　土器観察表（染付・色絵・青磁）

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	種　別	器　種	法　量（cm）			残存率		焼成	文　様			産地	時期
							口径	器高	底径	口縁部	底部		外面	内面	見込み		
11	12	5	－	SK２	染付陶器	広東碗	－	－	－	～1	－	良好	井桁文	圏線	－	瀬戸	10小期
12	12	6	－	SK２	青磁	花生	5.6	－	－	4	－	良好	－	なし	なし	瀬戸美濃	江戸期
16	12	4	－	SK２	染付炻器	染付丸碗	10.8	6.1	4.6	4	4	良好	山水文	圏線	帆掛舟	美濃	10～11小期
22	13	4	－	SQ１	染付磁器	水滴	－	－	－	－	－	良好	草花文	なし	なし	瀬戸美濃	10～11小期
26	13	5	－	SL１	色絵磁器	小瓶	1.3	－	－	12	－	良好	丸文･蓮弁文	なし	なし	瀬戸美濃	明治期
48	14	5	C６	Ⅰ層	染付炻器	広東碗	－	－	5.0	－	4	良好	－	－	花文	美濃	10小期
49	14	5	A９	Ⅱ層	染付炻器	箱形湯呑	6.6	5.2	3.6	5	4	良好	七宝文 菊割花つなぎ	圏線	なし	美濃	10～11小期
53	14	5	A９	Ⅱ層	染付	小皿	9.6	3.0	4.5	7	4	良好	草文	斜格子	花文	美濃	９～10小期
54	14	5	A９	Ⅱ層	染付炻器	小皿	9.2	2.5	4.8	7	4	良好	なし	虫文	花文	美濃	10小期
91	17	4	B８	Ⅱ層	染付磁器	丸碗	9.6	5.1	3.8	7	4	良好	梅文	なし	なし	肥前	江戸期
92	17	5	A８	Ⅱ層	染付磁器	箱形湯呑	－	－	3.7	－	4	良好	－	－	五弁花	肥前	江戸期
93	17	5	B８	Ⅱ層	染付磁器	小瓶	－	－	－	－	－	良好	松	なし	なし	肥前	江戸時代
94	17	5	C６	Ⅱ層	染付磁器	小瓶	1.5	－	－	12	－	良好	下がり藤･松	なし	なし	瀬戸美濃	10～11小期
95	17	4	A８	Ⅰ層	染付磁器	仏餉具	－	－	4.0	－	4	良好	唐草文か	なし	なし	瀬戸美濃	10～11小期
96	17	4	－	Ⅰ層	染付磁器	段重	10.9	4.8	9.9	3	2	良好	縦鎖線文	なし	なし	瀬戸美濃	11小期～明治初期

第７表　土錘観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	種　別	材質	法　量（cm）			質量（g）	分類	時　期	備　考
							全長	全幅	穿孔径				
85	17	8	B７	Ⅱ層	土錘	陶製	5.8	1.7	0.6	15.9	Ⅰ類	江戸期	大型。つなぎ目明瞭。
86	17	8	D６	Ⅱ層	土錘	陶製	3.4	1.9	0.6	(11.4)	Ⅰ類	江戸期	大型。つなぎ目明瞭。中央付近で折損。
87	17	8	B７	Ⅱ層	土錘	陶製	4.1	1.6	0.5	7.7	Ⅰ類	江戸期	小型。つなぎ目明瞭。
88	17	8	F３	Ⅱ層	土錘	陶製	5.0	1.8	0.4	17.5	Ⅱ類	江戸～明治期	大型。両端に面取り調整あり。
89	17	8	F２	Ⅱ層	土錘	陶製	4.8	1.1	0.4	8.0	Ⅱ類	江戸～明治期	小型。両端に面取り調整あり。

第８表　陶製品・土製品観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	種　別	材質	法　量（cm）				時　期	備　考
							全長	全幅	全高	穿孔径		
84	16	8	C７	Ⅱ層	玩具(鶴)	陶製	(2.7)	2.2	(0.3)	－	江戸期	灰釉を施釉。頭部欠損。
98	17	8	－	Ⅰ層	土鈴	土製	3.0	2.9	3.4	0.7	－	素焼。一部欠損。

第９表　瓦観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	種別	法　量（cm）							備　考
						面幅	垂れ長	奥行	文様区長	文様区幅	瓦当長	厚み	
100	17	8	F２	Ⅱ層	軒桟瓦	30.0	4.8	(9.4)	14.0	2.9	3.2	1.8	菊花文あり。
101	17	8	E５	Ⅱ層	軒桟瓦	(6.0)	4.6	(8.4)	(6.0)	(2.6)	－	1.6	不明文様あり。
102	17	8	－	Ⅰ層	鬼瓦	(15.0)	(11.3)	(2.5)	－	－	－	1.8	面に線刻あり。

第10表　石製品観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	種　別	法　量（cm）			材　質	備　考
						全長	全幅	全高		
17	12	9	B８	Ⅱ層	上臼	(37.4)	－	7.4	花崗岩	穿孔あり。3/4欠損。
104	18	9	－	Ⅰ層	下臼	(35.4)	－	7.2	斑状花崗岩	3/4欠損。
105	18	9	－	Ⅰ層	上臼	(36.6)	－	6.4	斑状花崗岩	穿孔あり。3/4欠損。被熱。
103	17	6	B８	Ⅱ層	転用砥石	(11.2)	6.3	(1.3)	粘板岩	硯を砥石に転用。一部欠損。

第11表　金属製品観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	種　別	法　量（cm）			材　質	備　考
						全長	全幅	全高		
106	18	9	A８	Ⅱ層	鎌	(12.5)	(4.5)	0.5	鉄	腐食強。刃部欠損。
107	18	9	D５	Ⅱ層	釣針	5.8	0.5	0.2	真鍮	

第12表　煙管観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	部位	法　量（cm）					破片数	材質	時期	備　考
						全長	全高	火皿径	小口径	口付部口径				
108	18	9	B７	Ⅱ層	雁首	(4.8)	－	－	1.0	なし	1	真鍮	江戸期	
109	18	9	B７	Ⅱ層	吹口	7.1	1.1	なし	1.0	0.4	1	真鍮	江戸期	

第13表　銭貨観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	グリッド	遺構層位	銭文	分類	細分類	初鋳年	法量（mm）			質量（g）	材質	備考
									外径	内径	厚み			
110	18	9	C７	Ⅱ層	寛永通寶	古寛永	称岡山銭伸寛陰画	1637	24.4	19.5	1.7	3.7	銅	
111	18	9	－	Ⅰ層	寛永通寶	古寛永	称岡山銭俯永様退足寛	1637	23.5	19.2	1.3	2.4	銅	
112	18	9	－	Ⅰ層	寛永通寶	古寛永	称芝銭二草点手	1636	24.2	19.6	1.3	3.3	銅	
113	18	9	B８	Ⅱ層	寛永通寶	新寛永	江戸深川十万坪銭無印	1739	22.9	18.7	1.2	1.4	銅	
114	18	9	D５	Ⅱ層	寛永通寶	新寛永	四ッ宝銭跳永	1708	23.1	18.8	1.5	1.9	銅	一部欠損

第４章　自然科学分析

甕内土壌及び外面付着物の自然科学分析

１　はじめに

調査区西側Ｆ３～Ｇ３区のⅢｂ層基底面において常滑産の甕１点が、胴部下位を土坑内に埋められた状況で出土した。甕の内容は礫混じりの土壌のみで、その他の内容物を肉眼で確認することはできなかった。また、外面には厚さ１～３㎝を計る白色の物質が付着していた。

そこで、甕の用途を調べるため、次の自然科学分析を実施した。分析は、鈴木茂・藤根久（パレオ・ラボ）が担当した。なお、分析にあたっては、甕の用途を便所施設若しくは水甕と推測し、分析内容を選択した。

分析①　甕内土壌の寄生虫卵分析及び珪藻分析

分析②　外面付着物の蛍光Ｘ線分析

２　分析①：甕内土壌の寄生虫卵分析及び珪藻分析

【試料と分析方法】

試料は、甕内の上位層（分析№１）と最下層（分析№２）の２試料である（図版10）。試料１は、黒褐色礫混じり砂質シルト、試料２は黄褐色の礫混じり砂である。

寄生虫卵分析は、花粉分析と同様の処理を行った。試料（湿重約３～６ｇ）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に、46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

また、珪藻分析は、湿潤重量約１ｇ程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返した。次に、残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作成した。

【分析結果と考察】

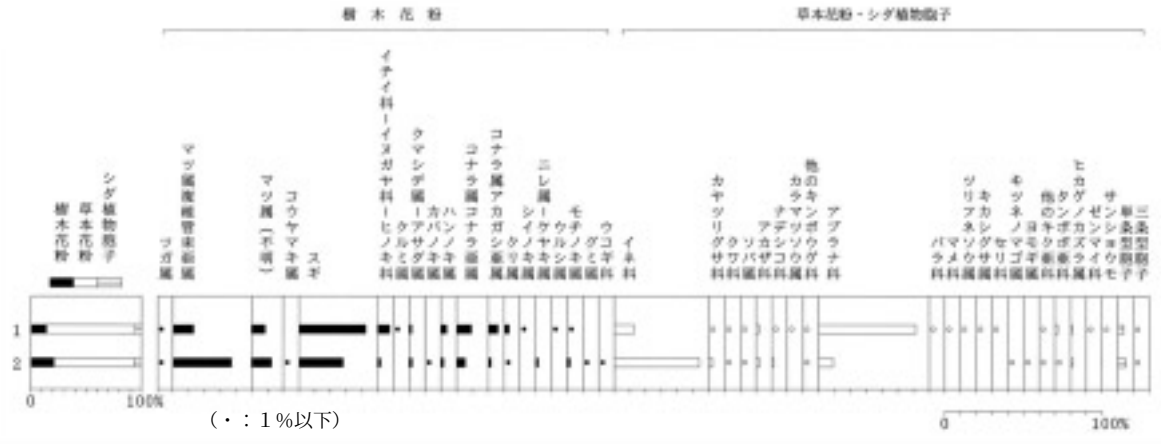
分析した２試料とも寄生虫卵は観察されなかった。一方、珪藻化石は少なく、陸域指標種群（安藤、1980）の Hanzschia amphioxys が数個体のみ検出された。

しかし、多くの花粉化石が観察されたため、花粉分析を行った。花粉分析の結果を第14表、その分布図を第19図に示した。なお、分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物は全花粉胞

第14表　産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2
樹木			
ツガ属	*Tsuga*	1	1
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	17	41
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	11	14
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	1
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	55	31
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	10	2
クルミ属	*Juglans*	1	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* - *Ostrya*	2	2
カバノキ属	*Betula*	-	1
ハンノキ属	*Alnus*	5	2
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	12	6
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	8	2
クリ属	*Castanea*	4	1
シイノキ属	*Castanopsis*	1	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus* - *Zelkova*	-	2
ウルシ属	*Rhus*	1	-
モチノキ属	*Ilex*	1	2
グミ属	*Elaeagnus*	-	1
ウコギ科	Araliaceae	-	1
草本			
イネ科	Gramineae	114	284
カヤツリグサ科	Cyperaceae	6	14
クワ科	Moraceae	1	1
ソバ属	*Fagopyrum*	1	2
アカザ科	Chenopodiaceae	18	11
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	7
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	1
アブラナ科	Cruciferae	562	48
バラ科	Rosaceae	3	-
マメ科	Leguminosae	1	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	1	-
キカシグサ属	*Rotala*	1	-
セリ科	Umbelliferae	1	-
キツネノマゴ属	*Justicia*	-	1
ヨモギ属	*Artemisia*	-	3
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	18	5
シダ植物			
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	12	8
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	-
サンショウモ	*Salvinia natans*	1	-
単条型胞子	Monolete spore	33	26
三条型胞子	Trilete spore	5	3
樹木花粉	Arboreal pollen	129	110
草本花粉	Nonarboreal pollen	731	378
シダ植物胞子	Spores	52	37
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	912	525
不明花粉	Unknown pollen	19	7

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



第19図　主要な花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

子総数を基数として百分率で示してある。

樹木花粉について、試料１ではスギが、試料２ではマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が最優占しており、遺跡周辺はこれら針葉樹林が広く成立していたとみられる。また一部にコナラ属コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林も林分を広げていたと推測され、コナラ属アカガシ亜属を中心とした常緑広葉樹類も一部に生育していたとみられる。

草本類について、試料№１ではアブラナ科が多産しており、塊状のものも観察される。これはあまり移動することなく花粉が埋積されたことをものがたっている。すなわちアブラナ科の花そのものがカメ内に落ちた（保存された？）か、アブラナ科が生育していた所の土壌（畑？）が大きく移動することなくカメ内に供給された可能性などが推察される。なおこのアブラナ科の多産についてはいわゆるアブラナや大根、カブなどの栽培が考えられる。また、ソバ属の花粉も検出されていることからソバの栽培も予想されよう。試料№２ではイネ科が多産しており、その多くは表面模様からイネの可能性が考えられ、試料№２においても稲作土の混入が推測される。

以上のように、寄生虫卵は検出されなかった。ただし、花粉化石の保存状態が良好であり十分植生が復元できる程度に含まれていたことから、本来寄生虫卵は含まれていなかったものと考える。

３　分析②：外面付着物の蛍光 X 線分析

【試料と方法】

試料は、甕外面の付着物１試料である。

試料は、必要量を採取してセラミック乳鉢を用いて粉末にした後、塩化ビニール製リングに充填して油圧プレス器を用いて20トン加圧・成型した。

測定は、フィリップス社製波長分散型蛍光 X 線分析装置 MagiX（PW2424型）を用いて検量線法による定量分析を行った。測定元素は、酸化ナトリウム Na_2O、酸化マグネシウム MgO、酸化アルミニウム Al_2O_3、酸化ケイ素 SiO_2、酸化リン P_2O_5、酸化カリウム K_2O、酸化カルシウム CaO、酸化チタン TiO_2、酸化マンガン MnO、酸化鉄 Fe_2O_3の10元素である。

【分析結果と考察】

第15表に付着物の蛍光 X 線分析結果を示す。その結果、酸化カルシウム CaO は0.17%であった。

漆喰は、天然の石灰岩や貝殻を焼いて、生石灰あるいは貝灰とし水を加えて消石灰し、この消石灰にのり材やスサなどを加えて作る（馬淵ほか、2003）。

また、モルタルは、この生石灰と砂を混ぜて固めたものであり、空気中の炭酸ガスを吸収して炭酸化して凝結硬化して方解石 $CaCO_3$となる。漆喰あるいはモルタルは、物の固定などを目的として固化するために用いることから、石灰分が数十パーセントとかなり高い含有量を示すと予想される。

こうしたことから、ここで分析した白色粘土は、漆喰あるいはモルタルなどではなく、自然の粘土と思われる。

第15表　付着物の蛍光 X 線分析結果

分析資料	Na_2O（%）	MgO（%）	Al_2O_3（%）	SiO_2（%）	P_2O_5（%）	K_2O（%）	CaO（%）	TiO_2（%）	MnO（%）	Fe_2O_3（%）	合計
付着物	0.06	1.28	18.47	68.24	0.649	2.82	0.17	0.65	0.004	2.95	95.29

4　まとめ

分析①の結果から、便所施設ではないと考えられる。また、甕内は藻の繁殖する環境でなかったことも判明した。一方、アブラナ科・イネ科・ソバ属等の花粉化石が検出されたことは、近隣地で耕作が行われていた事実を示している。

分析②の結果から、外面の付着物は漆喰やモルタルでなく、白色粘土であることが明らかになった。周辺の沖積層平坦地（大矢田・極楽寺・笠神など）では灰白色～白色の良質な粘土を産することが知られており、甕の外面に付着していた粘土もここで産出したものと推測される。甕を固定するため土坑内に粘土をはり、甕を据えたものと考えられる。

以上のように、当時の甕の利用状況について確かな言及はできないが、近隣地で行われた耕作に利用された可能性は指摘できる。また、甕内に水が蓄えられていた場合、常時蓋をするなどして日光を遮断すれば珪藻類は繁殖しにくい。よって、農業生産活動若しくは日常生活に用いるため屋外に埋設した貯水用の甕であったとする推測も可能である。

引用文献

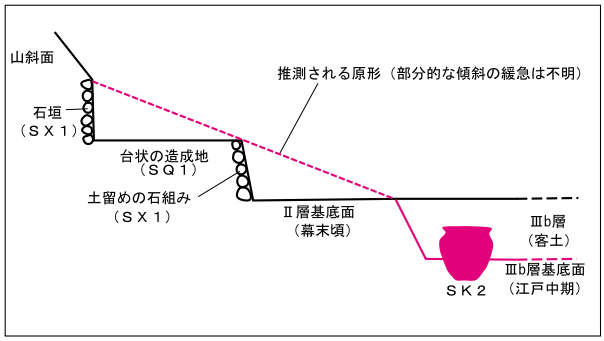
馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊　2003　『文化財科学の事典』朝倉書店522p.

第５章　まとめ

調査区中央で検出した石列（SL１）は地境の表示するもので、その東西で遺構の様相が異なることが判明した。したがって、ここでは調査区を東西に分けて考察を行う。

１　調査区西側の遺構について

Ⅱ層基底面で検出した遺構は、幕末期の屋敷跡に伴うものと、時期・性格が不明のものとがある。後者も、出土遺物より判断して、古くとも幕末期をそれほど遡らない時期のものと推測される。また、F３・F４・G３区にはⅢb層があり、その基底面で甕埋設遺構（SK２）を検出した。甕は農耕に用いられた水甕であった可能性が高く、甕の生産時期から17世紀末～18世紀初頭の遺構と推測される。この時期にはSK２の位置を境に山側が一段高くなっていたが、その後、甕施設が廃棄されるとともに、山側へ平坦地の拡張がなされ、上記の屋敷(幕末期)が建てられたものと思われる。



第20図　調査区西側の遺構面模式図

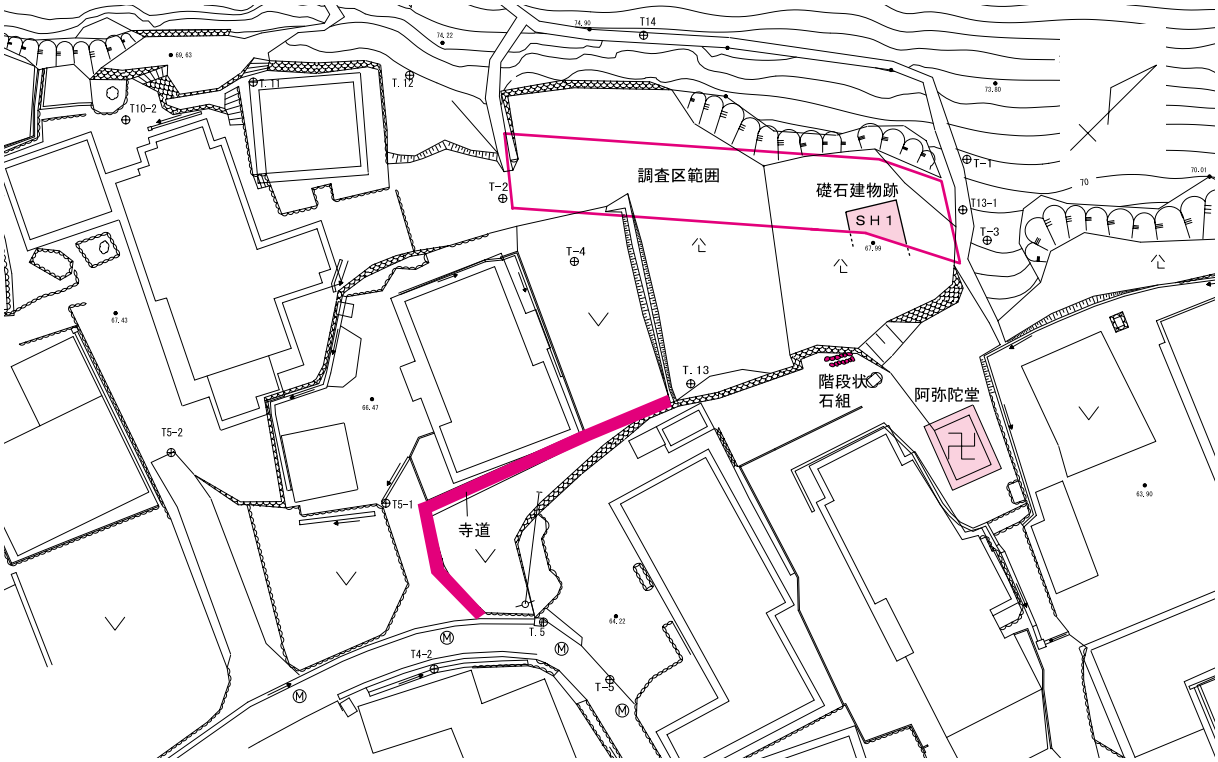
第21図　横越村絵図（横越自治会所蔵）

2　調査区東側の礎石建物跡（SH１）について

礎石建物跡（SH１）に関しては、東側の平坦地の中央に位置すること、敷土を伴うこと、周辺から土師器皿がまとまって出土したことなどが特徴と言えるものの、検出状況・出土遺物から遺構の性格を特定することはできなかった。また、桁行が不明のため正確な全体像は掴めないが、梁行が１間（約2.1m）という点から、一段低い土地に存在する阿弥陀堂ほどの規模を持つ建物でなかったかと推測される。阿弥陀堂は、既に元禄元年（1688）の「横越村絵図」に見え、現在と同じ位置にあったことが知られる。当時、SH１の礎石建物は既になかったのか、絵図に建物は描かれていない。

遺跡の周辺に目を向けると、かつて地元住民に「寺道（てらみち）」と呼ばれた路地が、現在も民家の脇に存在する。この道はちょうどSH１の西に通じる。さらに、阿弥陀堂の裏手（北西）には石垣に遮られた階段と思われる石組が存在する。全幅は２mほどで、各段中央の石を立たせて左右を交通を分ける。これが上方に続くと、SH１の正面付近に当たる。階段が石垣に先行することは確実である。

阿弥陀堂を見下ろす場所に住居を構えるとは考えにくく、上記の状況を踏まえれば、SH１が阿弥陀堂のような宗教施設（仏堂）であった可能性も想定できそうである。その場合、時期は元禄年間以前となる。



第22図　寺道・階段状石組位置図（S＝1/500）

3　「清願寺」について

今回の調査では、中世の寺院「清願寺」について確実な手がかりを得ることはできなかった。しかしながら、清願寺地内という限られた範囲に寺院が存在したのであるから、SH１が阿弥陀堂のような小規模な堂宇で、「清願寺」に関連若しくは付帯する宗教施設であった可能性は否定できないと考える。

参考文献

井上喜久男　1992　『尾張陶磁』　ニュー・サイエンス社

江戸遺跡研究会　2001　『図説　江戸考古学研究事典』

金子健一　1996　「尾張・三河地方のコウロク」『第４回考古学フォーラム　鍋と釜　そのデザイン』東海考古学フォーラム実行委員会

岐阜県　1971　『岐阜県史』通史編中世・近世

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2004　『一本杉・茶屋下・改田遺跡、栗坪遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2004　『深戸 A 地点遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2005　『重竹遺跡』

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2002　『江戸時代の瀬戸窯』財団法人瀬戸市文化財センター企画展

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2003　『江戸時代の美濃窯』財団法人瀬戸市文化財センター企画展

静岡いづみ会　2000　『新寛永通寶』

瀬戸市　1998　『瀬戸市史　陶磁史編六』

高林玄寶　1958　『美濃市と金森長近公』

都立学校遺跡調査会　1990　『白鴎』

中野晴久　1986　「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗試料館研究紀要Ⅱ』常滑市民俗資料館

増尾富房　1976　『古寛永泉志』

美濃市　1979　『美濃市史』通史編上・史料編

美濃市教育委員会　1989　『美濃市西南部古窯址群』

美濃市教育委員会　1999　『中屋敷遺跡』

美濃市教育委員会　2003　『山ノ神遺跡』

美濃市教育委員会　1990　『美濃の町並み』

美濃市教育委員会　1999　『岐阜県美濃市遺跡分布地図』美濃市文化財調査報告　第12号

遺跡遠景（東の対岸から）

遺跡全景（南東から）

図版２

調査区全景（南東から）

SX１検出状況（東から）

SL１検出状況（南西から）

阿弥陀堂（横越清願寺地内）

阿弥陀堂裏手（北西）に残る階段状石組

SH１検出状況（南東から）

SH１土師器皿出土状況

SH１完掘状況（北西から）

SK１完掘状況（北から）

SK２・SK３遺物出土状況

SK２土層（南西から）

SK２・SK３完掘状況（南から）

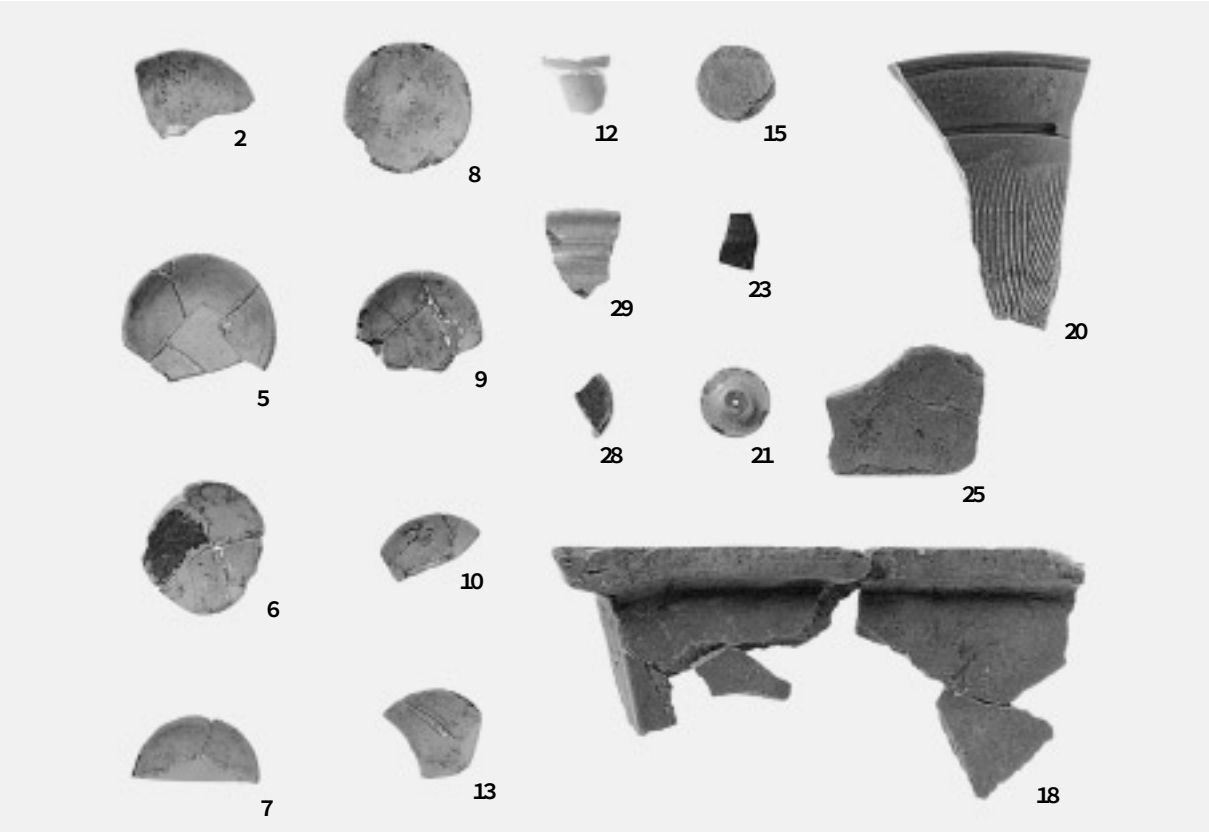
SC１石臼・円礫出土状況

図版４

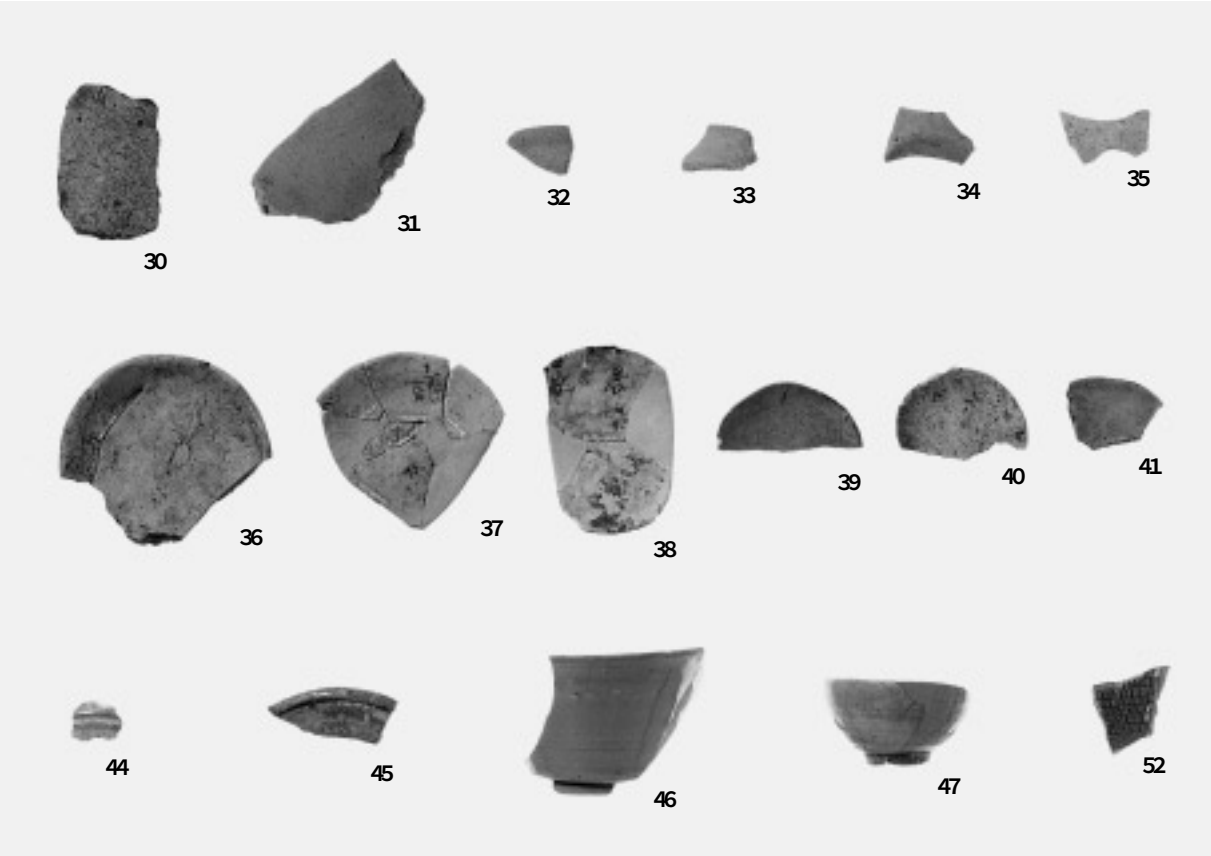
出土遺物（１）

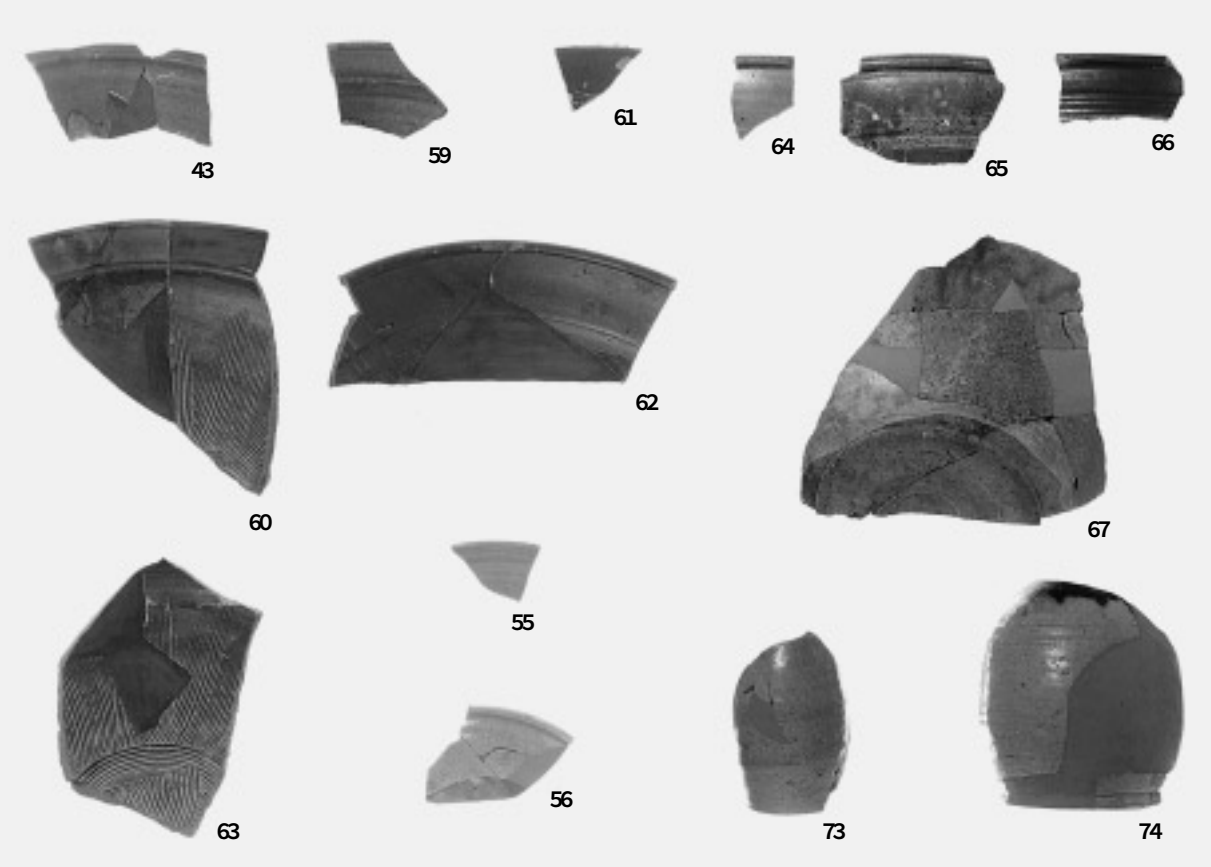
出土遺物（２）

図版６



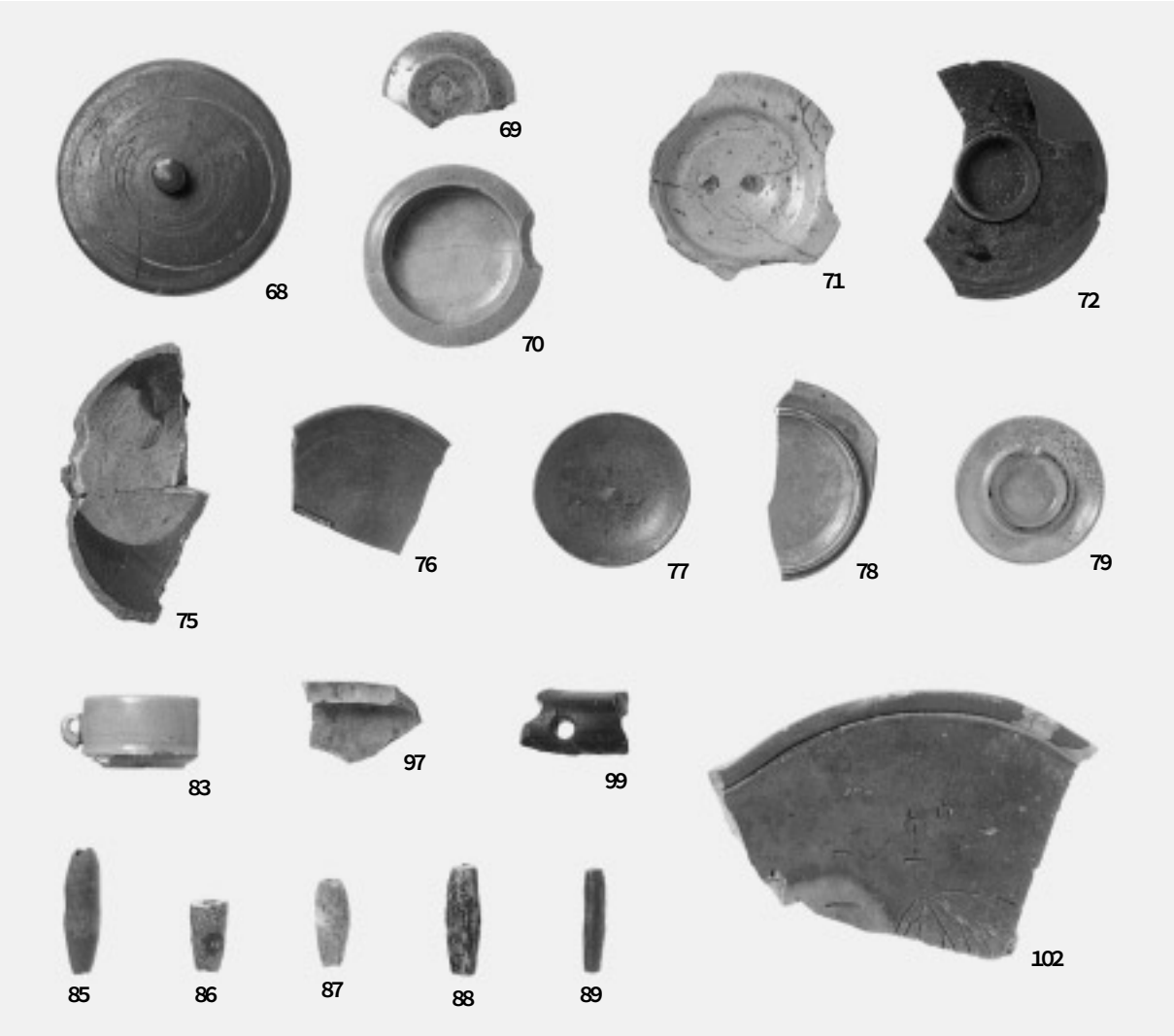
出土遺物（３）


30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
44
45
46
47
52


43
59
61
64
65
66
60
62
67
55
63
56
73
74

出土遺物（４）

図版８

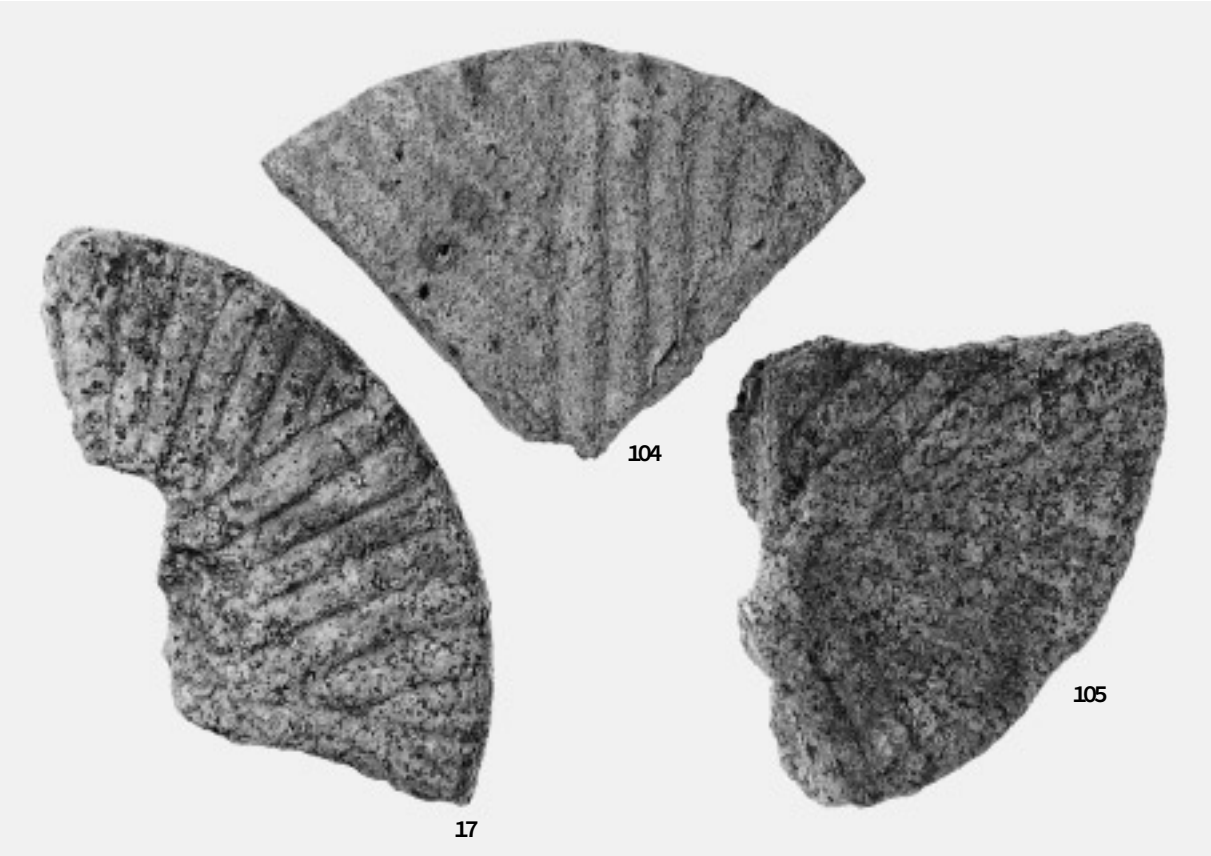

68
69
70
71
72
75
76
77
78
79
83
97
99
102
85
86
87
88
89

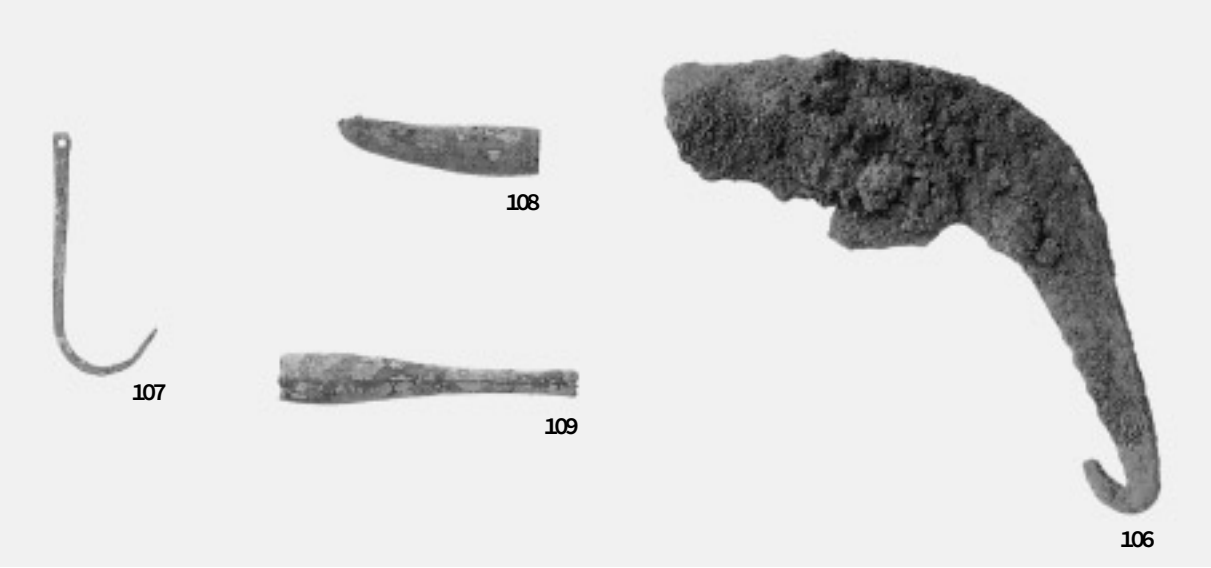
98
84
42
24
3

100

101

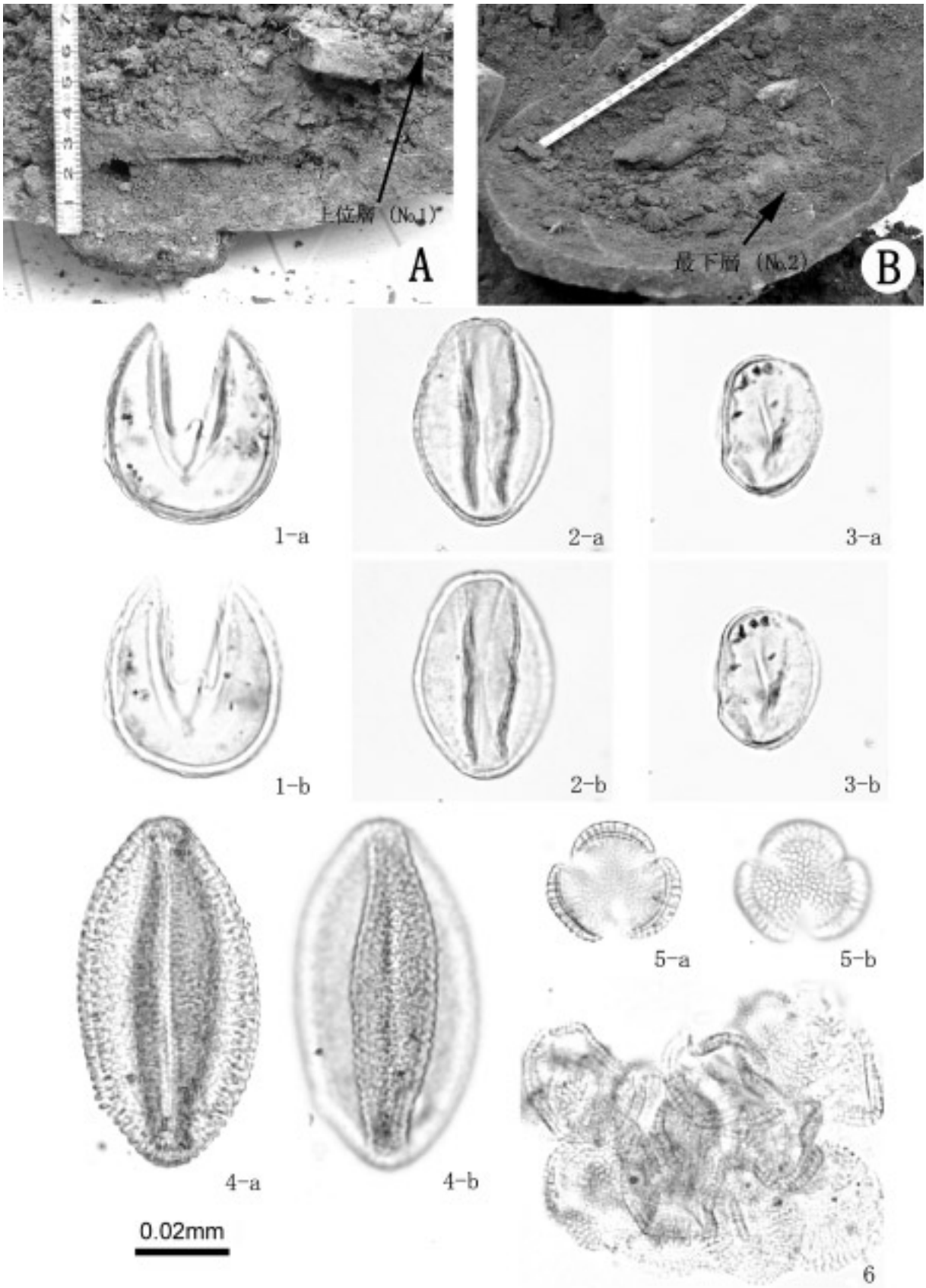
出土遺物（５）





出土遺物（６）

図版10



A：甕内土壌上位層（分析№１）　B：甕内土壌下位層（分析№２）
１：スギ PLC. SS 3870 No.１　２：コナラ属コナラ亜属 PLC. SS 3876 No.２
３：コナラ属アカガシ亜属 PLC. SS 3875 No.１　４：ソバ属 PLC. SS 3873 No.１
５：アブラナ科 PLC. SS 3874 No.１　６：アブラナ科花粉塊 PLC. SS 3872 No.１

甕内土壌試料と土壌中の花粉化石

報 告 書 抄 録

ふりがな	せいがんじあと
書　　名	清 願 寺 跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第100集
編 著 者 名	山内裕行
編 集 機 関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
所 在 地	〒502-0003　岐阜市三田洞東１-26-１　TEL058(237)8550
発行年月日	西暦2006年３月１日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
せいがんじあと 清願寺跡	ぎふけんみのし 岐阜県美濃市 よこごし 横越	21207	09174	35° 32′ 31″	136° 53′ 51″	20041004 ～ 20041224 188㎡	急傾斜地 崩壊対策 事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
清願寺跡	社寺跡 屋敷跡	中世～近世	礎石建物跡１棟 甕埋設遺構１基 土坑・小穴10基 焼土遺構１基など	中世陶器13点 土師器皿132点 近世陶磁器1,482点 土錘40点など	

調査区東側では礎石建物跡１棟を確認した。梁行１間×桁行不明であり、全体像は掴めなかったが、比較的小規模な建物と推測される。この遺構はＬ字状の敷き土（良質な褐色土）を伴い、敷き土から土師器皿２点が出土した。この建物跡の東には阿弥陀堂があり、両者は規模・向きなどの点で類似しており、建物跡は仏堂跡であった可能性がある。一方、調査区西側では甕埋設遺構１基を確認した。用途について確実な言及はできないが、甕内堆積土壌の自然科学分析の結果、農業生産活動に用いられた水甕であったと推測される。遺構の年代は、甕の生産時期から17世紀末～18世紀初頭と考えられる。

一方、遺物は破片数で1,736点出土した。近世・近代陶磁器類が大半を占めるが、土師器皿や土錘も多数出土した。また、調査区東側で出土した遺物は、西側の遺物より概して古い。

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書　第100集

清　願　寺　跡

2006年３月１日

編集・発行　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜市三田洞東１―26―１
印　　刷　西濃印刷株式会社